

俚諺に現れた臺灣及支那の家族生活

山 中 彰

日 次

序 説

- 一、臺灣に於ける家族生活の變遷
- 二、俚諺による家族生活の研究
- 三、使用俚諺に就いて

第一 婚 姻

- 一、結婚は人生的一大事である
- 二、縁（因縁）と仲人
- 三、相手の選擇（擇婚）

第二 夫 婦

- 四、夫婦關係
- 五、夫婦の道

六、夫婦の種々相

七、死 別

八、鰥 寡

九、再 婚

一〇、妾

一一、結婚に伴ふ親族及姻族關係

イ、妻の娘家における關係

ロ、妻とその里方との關係

ハ、夫と妻の里方との關係

ニ、男女兩家の關係

第三 親 子

一二、親子夫婦

一三、親子關係

イ、親子の關係

ロ、親の愛

ハ、親の心

ニ、子の心

ホ、親子の類似

一四、父

母

一五、子

一六、娘

一七、孝行と慈愛——親子の道

イ、孝行——子の道

ロ、慈愛——親の道

一八、血のつながり

一九、繼母(後母)

二〇、婢

僕

二一、兄弟關係

二二、家族秩序内に於ける兄弟

二三、姉妹關係

第五 親族、姻族

二四、親族、姻族

第六 家

二五、世代

二六、家の組織

二七、家の統制

二八、家のいとなみ

二九、我家

序　　説

一、臺灣に於ける家族生活の變遷

領臺以後臺灣本島人の家族生活に多大の變化があつたことは一般の認める所である。義務教育、徵兵制の施行と共に近い將來に更に急速な變貌を來すことは明かである。處で、家族生活が如何に變化して來たかを知る爲には、それが如何なるものであつたかを先づ知らなければならぬ。又今後如何なる方向に如何に誘導して行くべきかを知る爲にも、それが如何なるものであつたかを知る必要がある。支那大陸から移住した當時の家族生活は、若干の地域的特殊性を除けば原型的なものは恐らく現在の南支那及その他の地方に尙残つてゐるであらう。支那の人口の八割近くを占める停滯的な農民が今日も依然として村落及家族を中心とした生活を營んでゐることは、既に學者の指摘した處である。支那の家族生活を理解する爲にも、又それが將來恐らく遭遇するであらう處の變貌を豫見する爲にも、我が臺灣の家族生活の考察は若干の意義を有するものであらう。

大陸より臺灣へ移住してから領臺當時迄の家族生活が如何なるものであつたか、殘念ながらこの方面は殆ど未だ開拓されてゐない。詳細なことは今後の研究に待つべき所であるが、我等の現在の家族生活と我等の子供の時の見聞或ひは父老より聞いた話等を綜合對照して、過去の家族生活と現在の家族生活との相異の若干の基本的な事實を指摘することは出来る。

社會的機能より見るならば、過去の家族は第一に一つの自衛團體であつた。蕃害、土匪、異族異鄉者間の爭鬭、或ひは生活の秩序を破る犯罪者等、整然たる治安と秩序の下に生活する現在の我等に想像の出來ない幾多の敵に備へる爲に、部落が一體となり同族のものが一體となつたのであるが家族がやはり防衛の中核體であつた。現在でも古い家屋に尙銃眼が残つてをり、昔は餘裕のある家なら銃器刀槍等を備へたものであつた。現代の人にとって一つの珍しい俚諺に過ぎない『朝々防火、夜々防賊』といふのは、昔の人にとっては切實な問題であつた。（此の點については本論叢第一輯に收めてゐる富田芳郎氏の興味深い記述『臺灣聚落の研究』を参照されたい。）現在では防衛の機能は完全に國家の手で行はれてゐる。

經濟生活について見るに、農家においては收穫の後に穀を倉に貯藏し、必要に應じて自家において人力で糾搗をし夜間に婦女が精白をする。蔬菜家禽家畜漬物醤油等生活の必需品は殆ど

自家で生産し、街で買ふのは極く限られたものに過ぎなかつた。更に古くは機織もやつたものであつた。來客でもある時は鶏をつぶし家族が忙しく立ち働いて之をもてなす。生産においても消費においても謂はゞ家族が經濟生活の基體であつたのである。處が現在の人、殊に都市生活者にとつては、米蔬菜肉漬物醤油等は電話をかけて商店から取りよせるものであり、來客でもあれば之を料理屋に案内する。日常生活必需品の生産といふ機能は殆ど家族生活から消失してゐる。過去では職業といへば家業に他ならなかつたが現在は個人が會社銀行組合等の大きな團體に入り込んで働くことになり、農民といへども決して自足的封鎖的な生活をするものでない團體に入り込んで働くことになり、生産組合やその他の團體と密接な關聯を結んでゐる。則ち社會的分業が甚だしく進み流通の秩序維持もそれゝ部落、同族の長老、殊に家族における有力な家長の手によつて行はれる。

學校の設立される前には處々に書院或ひは書房の如きものがあつても、子供の教育は家に先生を迎へ行くのが普通であつた。即ち現在國家が行つてゐる教育も昔は家族の機能の一つであつたのである。現在國家が行つてゐる司法機能に當るもの、即ち部落内、同族内或は家族内の秩序維持もそれゝ部落、同族の長老、殊に家族における有力な家長の手によつて行はれ

たのである。更に祭祀は昔の家族生活に非常に重要なものであつた。祖先の命日、歳時行事、毎月の行事、家庭によつては毎日の朝晩の行事迄あつて、家族は一つの祭祀團體であつた。構成員の多い家族の結合を固め同族の連結を緊密にする爲に、祭祀は不可缺なものであつた。だが現在ではこの點も非常に簡略になり粗略になつた事は覆ひ得ない事實である。

我等の共存生活の基本的な形態は時代によつて變遷する。かつては氏族が最も重要な形態であつた。氏族は數個の家族態を統制し共存生活の重要な統制機能を行つて來たが、氏族制度が衰へると共に各家族態は獨立して從來氏族の手で行はれた統制機能の大部分を踏襲したのである。之が即ち所謂大家族で、そこでは現實に協同してゐる夫婦及親子のみでなく、過去及未來に涉りその家の一員として既に死亡した者、今在る者、やがて生れる者の全體を、皆その構成員に數へる。之は現實的な家族態の一連續としての抽象的存在であり、超世代的家族と呼ぶるべきものである。（中川善之助教授『身分法學』三五頁以下参照）この大家族は、氏族の後を受けてその行つた重要な統制機能、即ち外敵防衛、秩序維持、經濟生活、教育、祭祀等を行つて來たのである。領臺以前の我が臺灣の家族がそれであり、そして現在の支那の農民の家族もさうであらうと思ふ。

國民經濟に裏付けられ、強力な集權的統制組織を有つ近代國家の出現と共に、大家族は社會生活の基本的團體としての地位を之に譲らざるを得なくなつた。今や外敵防衛、秩序維持、經濟、教育等の機能は、家族より國家の手に移らざるを得ないのである。家族の機能の變化と共に家族の形態、構成員數、家族間の關係等も必然的に變化せざるを得ない。然して領臺後帝國の整然たる國家活動の下に產業經濟の著しく發達した我が臺灣において、家族生活に上に指摘した様な機能の變化が明瞭に看取されるのである。

一一、俚諺による家族生活の研究

共存生活態としての家族生活の變遷史等については詳細な論述を要する處であり、上に述べた所はほんの粗雑な素描に過ぎない。筆者が此處で試みたいのは、近代的な變貌を見る前の家族生活の姿を明かにすることである。これについても種々の方面より種々の方法を以て探求することが出来るが、此處では俚諺によつて家族の社會的關係を考察したい。

た所である。諸種の未開人或ひは半開人に關する事例を割愛して此處では専ら支那に限ることにしやう。支那の俚諺について長く漢口に駐在したウエスレー派の宣教師スカルボローは次の如く述べてゐる (Scarborough, W.: A Collection of Chinese Proverbs, 1875, Shanghai, Introductory Essay)。支那人は非常に俚諺を愛好し、日常會話に於いて非常に數多く且つ巧に使用してゐる。『會話に使用された場合俚諺は非常に支那人を喜ばせる奇警と餘韻とを齎し、交際を一層圓滑にする。』それのみでなく、俚諺を引用することによつて相互の理解を早め、進んで相手の心に肉迫することが出来る。『支那の俚諺を廣く熟知することは、宣教師にとつて最も大事なことである。個人的な經驗によつて、又他人の屢々證言した處によつて、極く僅かしか心得てゐなくとも支那の俚諺は日常大へんに役に立つ、といふことを我等は勇敢に主張する。俚諺一句が時々ダレ氣味の會衆の注意を喚起し、時として説教の開始と共に聽衆の心を捕へてしまふことがある。俚諺一句は時々不穏な空氣をはらむ聽衆からだやかな微笑を誘發し、今迄なかつたなごやかな空氣をかもすことがある。適切に引用された俚諺は至極簡単に且つ力強く眞理を傳へることに役立つ。こまかい長い議論を要することなく、貴方が傳へやうとする觀念を一擊の下にたゞき込むことが出来るのである。』

俚諺は直接に庶民の心に響くものである。更に正確に表現するならば、俚諺は直接庶民の心に響くものを體現してゐるのである。俚諺によつて體現されたもの、それこそ萬人によつて承認され、世代より世代へと受け継がれる所の、共存生活にとつて不可缺な規範序秩及び爾餘の文化財なのである。俚諺を引用することによつて相互の理解を深め相手の心に肉迫することが出来るのは、實に短い言葉を以て社會生活の核心にふれ得たが爲に他ならない。

俚諺は生活の各部面において必要にうながされて生れて來たものである。着物を着てゐる間我等は着物の存在を意識しない。それを脱ぐ時、着る時或ひは何かの異變のある時に始めて着物の存在が意識に上る。社會生活も圓滑に運ばれてゐる間は殊更に意識に上らないが、解決しなければならない問題の起つた時、或は今迄かつてない事物が出現した時に、意識にはつきり現れて來るのである。そして之を處理し解決する際に、勞力及腦力經濟の爲に同じ事態が發生した場合に直ちに又適用することが出来る様に定式化するのが常である。『どんな場合にもしきたりがある』とアラビア人の俚諺が謂つてゐる。このしきたりが俚諺として確定されるのである。各生活部面において問題の起る處そこに俚諺が存在する。今同一社會において採集した多數の俚諺を、その發生した生活部面に應じて組織的に分類整序するならば、各生活部面の姿

が浮び上り、社會全體の輪廓が現れて來るのである。

筆者が支那の俚諺について研究した所では次の如き部面がある。第一に郷土の沿革、俗傳、名所、名物等に關するもので、之は現在の歴史地理に當るものである。第二は生活上の實踐知識で、(1)動植物の性質、生活、(2)食用動植物の性質、生殖、發育、收穫等、(3)季節、天候の變化、豫知等に關するもので、現在の生物學、農學、氣象學に大體當るものである。第三は人間生活に關するもので、(1)人生、天命、(2)人間の心理、性情、性格、行爲、(3)家族、隣堡、その他の人間關係、(4)衣食住、生業、貧富、禍福等、(5)日常生活の準則、(6)個人の修養教訓、(7)社會生活の規範秩序、(8)社會生活の範疇等に關するものであり、現在の形而上學、心理學、性格學、社會學、社會科學、家政、修身、倫理學、法律學、哲學等に大體該當するものである。生活のあらゆる部門が俚諺に現れてをり、之によつて社會の全體の姿を概觀することが出来る。こゝに於いて我等は、『一國民の俚諺は、その慣習及び物の考へ方の現狀をかなり正確に反映せしめるものである。』(Sir John Davisの言。スカルボロー前提書、一九頁) こと、俚諺が『一民族の性格を顯著に反映し、その社會、政治及道德上の見解をありのまゝに集成したものであり、』この短い文句が『一民族の內的な生活を讀み取らせる』ことにかけては『宏大な著

作よりも更に役に立つ』(Farrer, J. A.: Primitive Manners and Customs, 1879, p. 78)などと理解することが出來、又『東部及中央アフリカの或る地方に於いて、俚諺が秩序維持及び教育の基礎をなしてゐる』理由を理解することが出来るのである(Oldham, C.E.A.W.: The Proverbs of the People in a District (Shahabad) of Northern India, Folk-Lore vol. 41, p. 320)。

俚諺を社會生活研究の資料に使用するに於いて若干の難點があるのは勿論のことであるが、又同時に幾多の特徴がある。この點については此處では立入らないことにし、只俚諺が一般に考へられてゐる様に好事家の或ひは教訓的な意義を有するのみでなく、もつともっと重要な理論的及社會的意義を有してゐること、記録、文字を使用或は常用せず、専ら口傳によつて文化傳統を傳承してゐる民族の社會生活の研究にとつて本質的な意義を有してゐること、舊蘭印に於ける Adatuecht (慣習法) 研究の如き政治的學術的意義を有してゐること、否、寧ろ Adair-echt の本質的な要素をなしてゐることを指摘することに止める。

III. 使用俚諺について

本篇に於いて臺灣及支那の俚諺と共に使用してゐるが、これについても一言の説明が必要であると思ふ。臺灣の俚諺は殆ど全部舊い傳統を引くものと見てよい。殊に主なる資料である總督府編輯の『臺灣俚諺集覽』は大正三年の出版にかかり、古い時代の臺灣を傳へたものと見えてよいものである。

支那の俚諺の蒐集は、古くは例へば後漢の崔寔の『農家諺』（尤も之については疑問があるが）を始めとして明の楊慎の『古今諺』、百卷に亘る大著である清の杜文瀾の『古謠諺』同じく清代の范寅の『越諺』その他『通俗編』（清、翟頴）、古諺閒譚（清、曾廷枚）等、或は農諺、歲時諺、占候諺等幾多あるが、之等は主として經典に出たもの或は文雅なもののみを扱ひ、坊間に行はれる俚俗なものは文人の筆の避ける處であつた。民俗學的な俚諺の蒐集は『越諺』等をその先驅と見ることが出来やうが、盛になつたのは近年のことすぎない。俚諺の數が多いのにひきかへてその蒐集は尙甚だ不完全であり、我が藤井乙男教授の『諺語大辭典』や中野吉平氏の『俚諺大辭典』の如き集成の書が出るのは尙かなりの年月を要するであらう。各地方の俚諺集は併しかなり多數存してゐる。だが殘念ながら、筆者が利用し得るのはそのごく一部分のみであり、それについても友人の好意に預る所が多かつたのである。

俚諺は一小地方の沿革故事名物を表示し、その地方の人でなければ意味が分らない様な非常に特殊的なものがあると同時に、他方又古今東西文明野蠻を問はず共に通ずる様な普遍的なものもある。如何なる俚諺も始めは一個人が謂ひ出したものであるが、發言者が忘れられて萬人共に之を用ふる處に既に俚諺の普遍性が存してゐる。殊に書寫に移されるに至つて急速度に且つ廣範圍に傳播する様になる。坊間に廣く行はれてゐる昔時賢文の如きがその一例である。

又聖人君子の言葉が俚諺として流布する場合も少くない。例へば『朱子諺訓』や『明心寶鑑』に於けるが如きである。更に幼學瓊林、聖喻廣訓、大上感應篇、陰陽文、千金譜等の如き啓蒙書、教訓書、俗書等或ひはその他歌謡、小説や戯曲を媒介として傳播することも甚だ多い。氣候、氣節、或ひは農業に關する俚諺が常にその地域性を伴つてゐるのに對して、一般の人間生活に關する俚諺はかなり強い普遍性を有してゐる。殊に同一文字を使用し、強い傳統に支配され、高度の傳播性を有つ支那社會に於いて、俚諺の普遍性は頗る顯著である。本篇に於いて取扱つた家族生活について見るに、臺灣及支那各地に共通な俚諺があり、臺灣に無く或ひは未だ採録されてゐないが支那の俚諺が臺灣に於ける生活關係をそのまま説明するものもあつて、筆者の知り得る所では、採録の俚諺は過去の臺灣の家族生活をよく説明してをり、又恐

らく支那の家族生活の原型的なものを説明してゐると思ふ。

俚諺は種々の方面から考察することが出来る。言語學的に、音韻學的に或ひは民俗學的に、同じ事柄を如何なる材料によつて、如何なる文字又は音韻によつて表現してゐるか、その相違の原因が何であるかを考察すること、更に一つの俚諺の歴史的變遷を考察すること等、共に重要な問題である。だが此處では社會學的な考察を旨とするから如上の諸點は一應前景から遠のかしめたのである。俚諺の解釋及び翻譯は極めて困難なことであり、完全なものは多數者の協力を待つべき處であらう。本篇に於いてなした組織的な分類も初めての試みであるので、妥當を缺く處もあると思ふが漸次整ふ様になると思ふ。尙一つの俚諺があればそれに反対するものがあるので常であるが、それは『反』の記号をつけて引照することにした。

引用資料の主なのは次記の通りで、各俚諺の末尾の括弧内の数字は各々その番號示すものである。

- (1) 『俚諺集覽』臺灣總督府編輯、大正三年
 - (2) 筆者が採集し又は諸種の文献より採録した臺灣の俚諺
 - (3) 『中華諺海』央囊哉編、民國十六年、『民諺』徐子長、梁達善共編、この二著は流布地域
 - (4) Scarbrough, W. A., Collection of Chinese Proverbs, 1875.
 - (5) その他諸種の文献より採録した支那全般の俚諺
 - (6) 蘇警子、陳佩真、謝雲聲合編『廈門指南』の内の廈門俚諺
- 右の外に『民俗週刊』(廣東大學發行)『福建文化』第三卷第二十三期の福建諺語專號その他幾多の小冊子を參照してゐるが、引用俚諺の末尾の括弧内に流布地域を記入することにした。一つの俚諺が二つの地方に流布してゐる場合、或ひは二つの文献に現れた場合は括弧内に共にあげることにした。

第一 婚姻

一、結婚は人生的一大事である

結婚は人間の務である。男でも女でも成長すれば當然結婚しなければならない。^{○一} 子女を結婚させずにはつてゐるのは、大失策を演じて物笑の種子になる恐れがある。^{○二} 息子の結婚は好

きな時に、娘の結婚は出来る時にと西洋人が謂つてゐるが、東洋に於いても娘の嫁入については殊に大事をとり、出来るだけ早くかたづけるのをよしとしてゐる。^③ 結婚年齢については、男は三十に、女は二十にするものといふ俚諺があるが、之は男は三十迄に女は二十迄に結婚せよといふ意味である。^④ 概して支那は早婚であるが、又早婚して早く餘計に一代を殖すのをよい事にしてゐる。^⑤ 結婚といふ人間の務をはたして始めて一人前にある。身をかためない間はたとひ齡三十を重ねても尙子供であり、まだ乳くさいものと謂はれる。^⑥ 男女が夫婦となつて始めて社會の一單位である家族を構成するので、妻のない男、夫のない女は共に社會構成員としては完全なものに數へられない。^⑦ 結婚は個人を一人前に仕上げ、社會構成員たらしめるものであるから、親としては、その子女をそれゝ結婚させて始めて親としての務をはたし、人生の一大事を完ふしたと稱することが出来る。^⑧ したがつてもし、この大事な結婚を妨害し破壊するものがあつたらこの上もない罪惡と謂はなければならず、強い祟を受くべきものである。^⑨

(1) 結婚は人間の務

男大當婚、女大當嫁⁽¹⁰⁾ 男は大きくなれば結婚し、女は大きくなれば嫁入るべきもの。男大須婚、女大須嫁⁽¹¹⁾男大當說親、女大當受聘⁽¹²⁾

(2) 子女を結婚させなければ失策を演ずることがある

男大不婚、女大不嫁、恐怕弄出大笑話⁽¹³⁾。男が大きくなつても結婚させず、女が大きくなつても嫁入らなければ、物笑ひの種子になる恐れがある。

(3) 娘の結婚を急げ

天要下、娘要嫁⁽¹⁴⁾ 空からは降るもの、娘は嫁に行くもの。女大不可留、強留必定仇⁽¹⁵⁾ 娘は大きくなつたら嫁にやれ、強ひて留めておくと仇になる。(反) 典當勿催贖、女子弗催嫁⁽¹⁶⁾ 質物の受出しと娘の嫁入りば、催促するものでない。

(4) 結婚年齢

男子三十而娶、女子二十而嫁⁽¹⁷⁾ 男は三十に娶り、女は二十に嫁入る。

(5) 早婚がよい

寧生早子、不養遲兒⁽¹⁸⁾ 子を生むなら遅いのよりも早い方がよい——遅く生れた子は育てても樂みがない。早婚添一代⁽¹⁹⁾。早く結婚せば餘計一代ふえる。

(6) 結婚して一人前になる

未曾吃飯終算早、未曾做親終算小⁽²⁰⁾。飯を食べてゐない中はまだ早い、妻を娶らない中はまだ若い。三十歲未成婚、愁如童子一樣⁽²¹⁾。三十になつても未だ結婚しないものは、尙子供同様。

三十歳未討娘、講話莫勿離^(三)。三十になつても未だ娘や妻はないものは、話が乳くさい。

三十歳無娶妻、講話還是帶乳異^(三)。

(7) 結婚して始めて一家をなす

無婦不成家^(三)。妻がなければ家をなさぬ。

男無妻、家無主、女無夫、身無主^(三)。男に妻がなければ家に主がなく、女に夫がないのは身に主がない。

男兒無妻家無主、女子無夫房無擇^(三)。男に妻のないのは家に主がなく、女に夫のないのは家に擇がない様なもの。

(8) 人生の一大事

兒成雙、女成對、一生大事已完^(一)。子は娶り女は嫁して一生の大事を完する。

兒討媳婦女招郎、人在世間鬧一場^(三)。息子に嫁をもたせ娘を嫁にやつて、浮世の務をひと通りはだしたことになる。

(9) 緣談をこはすものは崇る

婚姻勸撻、禍患勸開^(四)。縁談はあとまる様に勧めよ、喧嘩はやめる様に勧めよ。

伴人合、不可伴人頭^(四)。副ひ合ふ様にはからつても別れる様にははからうな。

打破人因縁、七代窮^(一)。他の縁談をこはすものは七代貧乏にする。

破人婚、三世貧^(三)。

一世破婚百世窮^(三)。

破人姻緣七世愆^(三)。他の縁談をこはすものは七代崇る。

破人婚姻、如殺人父母^(三)。ひとの縁談をこはすのはひとの親を殺す様なもの。

寧折十座廟、不毀一門婚^(三)。十の廟を壊しても一つの縁談をこはすものでない——後者の方がずっと罪深い。

一一、縁(因縁)と仲人

天命思想は漢族の生活のあらゆる部面を支配してゐる。生死、貧富、貴賤禍福災厄から衣食苦樂に至る迄、皆之運命の定める處である。婚姻も固より然りで、どういふ男とどういふ女とが何時何處で如何に契を結ぶかは豫めきまつてゐることであり、一に月下老人の指圖によるものであつて人力を以て如何ともすることが出来ない。¹ さうは言ふものの縁談に仲人が必要であることも否むことは出來ない。² 仲人は話を早くまとめてやうと思つて往々良い加減なことを謂ひ、安請合ひをするから、仲人の口はあてにならないもの、仲人はうそつきであると一般に謂はれる。³ だが立派な仲人なら男の方の女の方からの勝手な註文をあざへて話をまとめて行く。⁴

(1) 縁は天の定めるもの

姻緣天註定^(三)。姻緣は天がきめたもの——始めからきまつてゐるもの。

俚諺に現はれた臺灣及支那の家族生活

前世有縁今世結^四。前世に縁があればこそ今世に結ばれる。

千里姻縁一線牽^二。千里の姻縁一本の糸でつながれる。

有縁千里來相會、無縁對面不相逢^三。縁があれば千里離れてても落合ひ、縁がなければ面と向ひ合つてもつひに離合へない。

好姻縁拵打不殿^三。好い縁はぶち壞そうとしても壊れるものでない。

不要纏音面、只要夫星環^四。観音様の様な綺麗な顔を有つてゐても仕様なく、嫁入りの時期の來るのが大事である——女の婚期の早晚は天命の定める處で器量がよいかといつて必ずしも早くかたづくものではない。

姻縁到、不是媒人賢^二。かたづくべき時が來たので、仲人の腕が達者であつた爲ではない。

(2) 仲人も必要

天上無雲不下雨、地下無媒不成親^四。空に雲がなければ雨が降らず、世の中に仲人が居なければ縁談がまとまらない。

天上無雲不下雨、世間無媒不成婚^三。

(3) 仲人はうそつき

十媒九謊^四。仲人十人の内九人造がうそつき。

十媒九謊^三。媒人嘴、轎夫腿（江蘇）仲人の口は轎かつきの足の穢なもの——共にやすりほいもの。

(4) 立派な仲人

會做媒的罵兩頭、不會做媒的兩頭罵^四。立派な仲人は両方を押へ、下手な仲人は両方にしかられる。——立派な仲人は

男の方の方からの勝手な註文を押へて行くが、下手な仲人は良い加減なことを安請合ひして結局男の方からも女の方からも苦情をいはれる。

三、相手の選擇（擇婚）

結婚が人生的一大事なら之に失敗することはやがて人生に失敗することである。それ程に重要な結婚であるから、之に成功する爲に相手の選擇に充分意を用ひなければならない。たまく凶作に遭つても、或ひは商賣に失敗し航海で船が顛覆しても、この次の機會に希望をかけることが出来るが、ひと度悪妻に出會へば一生とりかへしがつかない。^一 女の方にしても悪い夫にめあはされたが最後、悪い墳墓に埋められたのと同様で一生うかばれない。^二 とかく娘を家柄のよい處へやりたがるのが人情であるが、併し不似合不釣合は不縁のもとで、相手の選擇に當つて何より釣合を圖らなければならぬ。^三 更に相手が承諾し望み願つて始めてよい縁組が結ばれるのである。^四 それでは具體的に如何なるものを選ぶべきであるか、婿には金持や家屋敷の大きいもの、田畠の多いもの、家柄のよいもの或ひは聘金を澤山出すものでなく、あくまでも本人の人物を選ばなければならない。^五 又娘には仕度（粧奩）の多いものや器量のよい

ものでなく、淑徳のあるものを選ばなければならぬ。妻には器量のよいものをと望むのが世情であるが、美婦佳人もまたはかないものであり、醜婦がかへつて申分のない妻である。⁹ 相手の選擇に當つてどういふ處に目をつけるべきであらうか。男尊女卑の社會では結婚の相手を選択すると謂つても、女の方はそれとなく遠まわしに婿の事を調べるだけであるが、男の方は相當丹念に媳を吟味する。臺灣では昔は親がわざ／＼女の家へ出向いて行く。その時媳となるべき娘がお茶を出すのであるが、貴ふ方の親は手を取つて見たりその他色々の所を吟味し、缺點がないものと認めて始めて婚約が整ふのである。之を『看親』或は『相親』といふ。

なほ媳となるべき人はかしこまつて本當のことが分りにくいでその血縁のもの、即ちその母親或は兄弟の様子を見て大體の判断をすることが出来ると謂ふのである。¹⁰ 相手の選擇に當つてこの他に注意すべき處、或は避けるべきことが色々ある。第一に年齢の問題で、女が年上なのは工合が悪く、殊に夫となるべき人がまたほんの子供である場合は女の不幸である。次に因縁いわれのつく女、例へば離縁された女或ひはつれ子のある女を避けるべきである。野合で結ばれた夫婦は副ひとげられないものであり、殊に絶対に避けるべきは、娼婦を妻に迎へることである。¹¹

大事に大事をとつて選擇をしても併し却々思ふ様には行かない。擇りに擇つてかへつていかものをつかまされる場合もないではない。釣合ふもの似合ふものが一緒になるものと思はれても、切角の見事な花が綺麗な花瓶に生けられずにきたない牛糞の上に生けられることも珍しくなく、とかく世は儘ならぬもの、皮肉なものである。¹⁰

(1) 妻の選擇は大事である

作着夕田望後冬、娶着夕菜一世人¹²。不作はひと時の貧乏悪妻は一生の貧乏。

種田不好一時窮、討瓊老婆一生窮¹³。不作はひと時の貧乏悪妻は一生の貧乏。

種不住莊稼一季子、接不住老婆一輩子¹⁴。

生意敵弗着一槽、老婆討弗着一世（越諺）商賣にしくじつてもその津度限りだが、女房の選擇にしくじつては一生のこと。

老婆討勿着一世、生意敵勿着一遭（紹興）。

舖船折梶一時窮、討瓊老婆一世窮¹⁵。船が轉覆し梶が折れても一時の貧乏たが、悪妻を貰つてしまへば一生の貧乏。

一代沒好妻、三代沒好子¹⁶。一代悪い妻に出會へば三代好い子が出ない。

(2) 夫の選擇も大事である

嫁壞人、葬壞墳¹⁷。やぐさものに嫁入るのは悪い墓場に埋められる様なもの——一生うかばれない。

俚諺に現はれた臺灣及支那の家族生活

葬墳還可取、擇婿不可悔^(二)。 墓塋^(一)がまだかへることが出来るが、一度きまつた婿は後悔しても追ひつかない。
女見説人家、過細訪査^(四)。 娘に縁談があれば愈入りに調べよ。

(3) 均 合

藝女望高門^(五)。 娘は家柄のよい處へやりたがるもの。

相女配夫^(六)。 娘の人柄に應じて然るべき夫にめあはせよ。

量郎娶婦、稱女嫁夫^(七)。 息子の人柄に應じて嫁を娶り、娘の人柄に應じて夫にめあはせよ。

門當戸對、兩下成婚配^(八)。 家柄が釣合つてよい縁組となる。

才子配佳人、瘤驛配破墮^(九)。 才子は佳人にふさばしく、瘤病みの驛馬^(十)がたゞへの挽田にふさばし。

上方金童配玉女、下方瘤驛對破墮^(十一)。 上の方では金童が玉女とつれそひ、下の方では瘤病みの驛馬^(十)がたゞへの挽田とが一緒になる。

(4) 合 意

兩相情願、好結親眷^(十二)。 兩方が望み願つて始めてよい縁組が出来る。

結親如結義、兩家莫生氣^(十三)。 緣を結ぶのは契を結ぶ様なもの、兩方とも腹を立てばならない。

媒人吃千杯酒、原人不肯落奈何^(十四)。 仲人にいくら酒を飲ませても相手が承知しなければ如何とも仕様がない。

(5) 具體的選擇條件——婿の場合

揃後住、不免揃大富^(十五)。 婦の人物を選べ、財産の多いのを選ぶな。 後住は後嗣の意。

善嫁女看婿郎、不善嫁女看屋場^(十六)。 娘を嫁入らせるに分つた人は、婿に目をつけ、分らない人は家屋敷に目をつけける。

會挑的挑兒郎、不會挑的挑房櫻^(十七)。 選び上手に婿を選び、下手なのは家屋敷を選ぶ。

會棟探新郎、不會棟探田莊^(十八)。 選び上手は婿を選び、下手なのは田畠を選び。

會撥撥對頭、不會撥撥門頭^(十九)。 選び上手は相手を選び、下手なのは家柄を選び。

會挑只挑奸女婿^(二十)。 選び上手はよい婿のみを選び。

嫁女擇佳婿、毋索重聘^(二十一)。 娘を嫁入らせるに付けてい婿を選び、聘金の多いのを求めてはならない。

(6) 具體的選擇條件——媳の場合

娶媳求淑女、勿計厚齎^(二十二)。 媳を娶るには淑女を求めよ、往度の選山なのを圖るな。

娶妻取德、娶妾取色^(二十三)。 妻は徳のすぐれたものを娶れ、妾は器量のよいものを娶れ。

(7) 美 婦 醜 婦

吃茶吃油鹽、娶妻取容顏^(二十四)。 料理を味ふのは油と鹽加減を味ふことになり、妻を娶るのには器量のよいものを娶ることになる。

華扇量人斗、嬪妻渡客船^(二十五)。 見事な屋敷に人を量る辦、綺麗な妻は客を渡す船——共にはかないもの。

醜婦招奴、無價之寶^(二十六)。 醜い妻馬鹿な召使はかけがひのないもの——共に忠實にして他にはかられる怨れがない。

(8) 目のつけごと

看花看梗、看親看頬^(二十七)。 花を選ぶなら梗に目をつけよ、娘を選ぶなら頬に目をつけよ。

但説に現はれた臺灣及支那の家族生活

買屋要看探、娶妻要看娘^(三)。屋敷を買ふ時は探を調べよ、妻を娶る時は母親を見よ。娘は母親。買衣看袖子、娶妻看男子^(三)。着物を買ふ時は袖を調べよ、妻を娶る時はその兄弟を見よ。男子は妻の兄弟。討姆看細舅^(三)。妻を娶る時はその弟を見よ。細舅は妻の弟。討姆は娶妻のこと。

(9) 避くべきもの

只許男大一層、不可女大一歳^(三)。男がひとまはり年上でも差間へないが、女が一つ年上であつてもいけない。寧嫁窮漢子、莫嫁搖蛋子^(三)。貧乏人に嫁入りしても子供に嫁入りするものでない。

有錢不治河濱地、娶妻不娶活人妻^(三)。金があつても河縁の田畠を買ふな、妻を娶る時は離縁された女を娶るな。活人妻は夫に死別したものでなく、離縁されたもの。

有錢不治墓河地、有錢不買活人妻^(三)。

第一驥車駕馬、第二驥飼人母子娘奶^(二)。一番馬鹿なのは車駕馬^(二)なること、次に馬鹿なのは連子のある情婦を養ふこと。車駕馬は祭りの行列で舞妓を肩に乗せるもの。

露水夫婦不到頭^(山東)。野合で結ばれた夫婦は副びとげられない。

表子上門、家散入亡^(福建)。娘婦が家に入つて来れば家族はありへば、うへになり入ば亡^(二)。

(10) 死はまゝにならぬ

揃仔揃、揃一的賣龍眼的^(一)。揃りに揃つて龍眼賣を選んでしまつた。——選びすぎでかへつて悪いものをつかまされた。

好々花插在牛屎上^(二)。見事な花がきたない牛糞の上に生けられる。

一染鮮花插牛糞裏^(三)。「染鮮花插在牛屎上^(三)。」

一塊好肉落在狗嘴裏^(二)。美味な肉が犬の口に落ちりんだ。

巧妻常伴拙夫眼^(一)。往々綺巧な妻が愚な夫に副はされる。

巧夫常伴拙夫眼^(二)。

好漢無好妻、懶漢守花枝^(二)。立派な男によい妻がなく、懶けるものが花恥ぢらう美人をかゝへる。

好妻無好漢、天下一大半、好漢無好妻、天下一大堆^(二)。見事な妻に「ふを」と「がづくのは世の中にさらにある」とことであり、立派な男に醜い女が副ふのは世の中に珍しくない。

清秀才郎到配不良之婦、乖巧女子反招恩拙之夫^(一)。立派な男がかへつて悪い女をめとられ、綺巧な女がかへつて悪かな夫にめあはされる。

第二 夫 婦

四、夫 婦 關 係

古來支那では五倫又は五常として五つの基本的な人間關係を擧げてゐる。この五つの人間關

係の内その何れを最も基本的なものとするかは、時と人とによつて異つてゐる。孟子（膝文公上）は父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の順序に排列し、親子關係を以て最も基本的なものとしてゐるのに對して子思（中庸）は君臣關係を以て最も重要なものとし、父子關係を之に次ぐものとしてゐる。處が易の序卦では、『有天地、然後有萬物、有萬物、然後有男女、有男女、然後有夫婦、有夫婦、然後有父子、有父子、然後有君臣、有君臣、然後有上下、有上下、然後禮義有所錯』と謂つて夫婦關係を以て最も基本的なものとし、父子、君臣、上下の諸關係を之に次ぐものとしてゐる。之は頗る興味深い事實である。

家族が事實上社會生活の基體をなしてゐる支那に於いて君臣と父子の二つの社會關係の内君臣關係を先となすのは、大義明分の上からの立論であつて、事實を示してゐるよりも寧ろ『かくあるべき』を要請してゐるものであり、Sein を示してゐるよりも寧ろ Sollen を示してゐるものである。家族關係が最も基本的なものであり最も重要なものであるのは覆ひ得ない處である。然らば家族關係の内の父子と夫婦との二つは如何であらうか。

禮教の上から父子關係は當然先に立つべきものであり、かりそめにも親子關係よりも夫婦關係を重しとするものがあるなら、それは許すべからざる外道と謂はなければならぬ。だが事

實上庶民生活に於いては、この關係は極めてデリケートである。夫婦關係に關する俚諺が極めて多數存在してゐる。又俚諺に現れた親子關係を夫婦關係に比較して見るに、子は成長すれば離れ去ることがあつても夫婦は一生つれ添ふものであり、老後の身にとつて心から頼りになるものは子よりも寧ろ老ひたつれはひである。禮教の上からはともかくも、事實上の庶民生活に於いては、親子よりも寧ろ易の序卦にのべてゐる如くに、夫婦が最も基本的な人間關係なのである。さればこそ夫婦を以て五倫の始とするものがあるのである。¹

夫婦は仲のよいものであり、殊に若夫婦の仲は蜜の様に甘い。² 袖がふれ合ふのも何かの縁である、まして一生の苦樂を共にする夫婦は百世の因縁恩愛で結ばれたものでなければならぬ。³ 夫婦は互に遠慮のない仲であり、恩愛のこまやかなものである。⁴ 殊に若い時からつれ添ふた夫婦の仲は又格別である。⁵

夫婦の間柄は併し仲がよいばかりでなく、他方に於いて衝突や喧嘩も避けられない。否仲がよいだけにそれだけ餘計に摩擦衝突が起る。人間關係の基本的な姿を分析して結合及分離の二つの範疇を確立し、社會關係はその内の何れかである、一即ち結合關係か又は分離關係かである、と説いてゐる學者がある。この圖式は併し人間關係の姿をありのまゝに表すものではな

い。結合と分離とは表面上相反對してゐるが、その實常に相表裏し、形影相伴うてゐる。人間關係に伴ふ結合及び分離といふ現象は全く人間關係の近さといふ基本的な事實に伴隨するものに他ならない。赤の他人なら帽子を逆に被つても一向苦にならないが、背の君ならネクタイの結び方が一寸をかしくても干渉せずには居られない。近い間柄だけにそれに伴ふ結合分離が強く現れる。夫婦の仲然りであり、親子の仲も又然りである。不是冤家不聚頭（前世の仇士でなければ一緒にならない）といひ、兒女夫婦冤怨縁（兒女夫婦はくされ縁）といふ所以も又茲に存してゐる。併し衝突喧嘩は緊密な間柄の内に於ける衝突喧嘩であるからその姿も又格別であり、所謂大も喰はぬ喧嘩である。市井巷間の夫婦生活の姿は俚諺の内に如實に現れてゐる。

人間として社會に處する以上、種々雜多な人と様々な關係を結ばざるを得ないが、その内何れが最も切實なものであらうか。親子の關係も固より重要であるが、併し若い時からつれそひ一生苦勞を共にした夫婦はやはり最も身近なものであり、老後の唯一の伴侶となるものである。子よりも老いたつれあひに餘生を託さうとするのが淋しい庶民生活の姿である。^{○7}

夫婦生活は庶民にとつて人生の唯一の安息所である。世の中には併し不幸な結婚生活に遭遇

するものも少くない。かういふ人にとっては妻はたえず不信の眼でながめられる。死んでしまつて始めて自分の妻と謂へるもので生きてゐる内はどういふ事をするか分らないと謂ふのは、不幸な生活よりにぢみ出る深刻な叫びである。又不幸な生活に手を焼いたあげく、よい妻といふものは既に死んだものか、或ひはこれから貴はうと思つてゐる妻で、現在一緒になつてゐるものには居ない、と謂ふものもある。更に『夫婦よりも兄弟』と謂つて夫婦關係よりも兄弟關係を重視するものもあるが、これについては後文（第四、二一）にふれることとする。

(1) 夫婦は人倫の始

人倫有五、夫婦爲先、大禮三千、婚姻是裏^{四〇}。人倫に五つあるが夫婦を第一となし、大禮に三千あるが婚姻が最も大事である。

(2) 若夫婦の仲

少年夫妻類如蜜^{四一}。若夫婦、蜜の様に甘い。

夫妻四目相對^{一〇}。夫婦の四つの目が向ひ合ふ——仲がよく、差向ひで離れない。

夫生某姐、食飯相看^{一〇}。離人形の櫻に美しい夫婦、御飯がすんでは眺め合つてゐる。之は仲のよい夫婦を諷刺する時に謂ふ。又仲よくくつつき合つて餉かないことを諷刺する時にも謂ふ。

庖生某旦、食餉相看^{一〇}。

(3) 夫婦は百世の因縁

一日夫妻、百世因縁^(一)。 一日の夫婦、百世の因縁。

一夜夫妻、百世恩^(二)。 一夜の夫婦、百世の恩愛。

一夜夫妻百世恩、百夜夫妻百載情^(三)。 一夜の夫婦百世の恩愛、百夜の夫婦百年の情誼。

(4) 夫婦は遠慮のない仲、こまやかな仲

穿衣見父、脱衣見夫^(一)。 着物を着て父にまみえ、着物を脱いで夫にまみえる。舅姑には禮貌をつくろになければならぬが、夫婦は互に遠慮のない仲。

夫妻恩厚、兒女情長^(二)。 夫婦の恩愛は厚く、兒女の情愛は長い。

夫妻恩愛甜如蜜、兄弟相爭硬如鐵^(結婚)。 夫婦の恩愛は蜜の戀に甘く、兄弟が喧嘩すれば鐵の様に硬く相譲らない。

(5) 若い時からのつれあひ（結髮夫妻）

結髮夫妻醜也好、粗布綿衣衣也牢^(三)。 若い時からのつれあひに醜くともよいものである。粗末な反物で着物を作つても結構丈夫な着物が出来る。

十根頭髮九根披、丈夫得愛無人欺^(三)。 髪があらかた抜けてるやうとも、亭主が可愛いがつて下れば馬鹿にするものはない。

十根頭髮九根飛、丈夫達愛無人欺^(三)。

夫妻保老、管伊外家死經^(三)。 夫婦が仲よくそびとげるなら里芋が死に絶へやうと縛はない。

公婆嫌還就可、丈夫嫌無處躲^(三)。 男姑にきらはねえとはまだしも、夫にきらはれ^(レ)は立つ潮がない。
「隻床不出二様人^(三)。 ひとつ床から二様な人が出ない——似たもの夫婦。

(6) 夫婦 喰 嘴

無冤無家、不成夫妻^(三)。 嘰嘴がなくては夫婦とはいはれない。

好夫妻、打到頭、不打不罵不久長^(三)。 仲のよい夫婦は始終喧嘩する、喧嘩をしなければそひとけられない。

張夫不蓋被、張妻不食糜^(三)。 夫婦喧嘩のあげくすねた妻は浦團をかけないし、すねた夫は御飯を食べない——火も食はない喧嘩。

床前相打、床尾講和^(四)。 眠床のはじで喧嘩したかと思へば向ふのはじで仲なほりする——夫婦喧嘩は寝て直る。

床前冤家床尾和（福州）。

夫妻無隔夜之仇^(五)。 夫婦には背越の喧嘩はない。

(7) 親子より夫婦

孩子滿間閣、弗及丈夫一隻脚^(三)。 子供が大勢居ても停主の足一本に及ばない——親身に頼りになるものは子よりも夫。

滿堂兒子、不如半路夫妻^(三)。 家中に多勢ある兒子よりも半路の夫婦。半路夫妻は中年に一緒になつた夫婦。

兒子做官歸、不如丈夫討飯歸^(三)。 役人になつて歸つて來た息子よりも乞食して歸つて來た亭主の方が頼りになる。

少年夫妻老來伴、一日不見問三遍^(三)。 若い時は夫婦であるが年とすれば茶飯み友達、一寸でも居なくなつたらすぐ聞ひさがす。

(3) 夫婦關係への不信

穿碎是我衣、亡故是我妻^(二)。 破れて始めて自分の着物であり、じくなつて始めて自分の妻である……未だ破れない着物未だ死亡しない妻は、他にとられ胥き去ることもある。

死了是君妻^(一)。 死んで始めてお前の妻だと謂へる。

一個死脫在、一個未曾喪來^(三)。 一人は死んだもの。一人は未だ賣つて來てゐるもの——よい妻は死んだ妻か或ひは未だ賣つて來ない妻だけで、既に賣つて來た妻、現在生きてゐる妻は皆惡妻である。

妻子似衣服^(一)。 妻子は衣服に似たもの——舊いものを捨て、又新調することも出来る。

五、夫婦の道

夫婦は何よりも和合し、苦樂を共にしなければならない^(一)。夫は妻に臨むに義を以てし、妻は夫に對して順を以て仕へなければならぬ^(二)。男性中心の社會では夫に隨順服從することが妻の最も重要な務であり、眠床に上った時は夫婦でも眠床を下りれば主従關係をとらなければならない^(三)。夫は生涯の伴侶として妻に事々相談するのがよいが、併し經驗うすく識見の狭い妻の所謂カーテンレクチニアに迷はされない様に心すべきである⁽⁴⁾。又妻を教育訓戒する際は

自ら子に對する場合と異つた方法をとらなければならぬ⁽⁵⁾。

(1) 和合、苦勞を共にする」と

夫妻相和合、琴瑟與笙簧^(一)。 琴瑟や笙簧の様に夫婦が相合する。

夫婦不和奴婢歎^(四)。 夫婦が不和なら奴婢まで馬鹿にする。

夫某同苦同甜^(一)。 夫婦は苦樂を共にする。

(2) 義と順

夫以義爲良、婦以順爲正^(三)。夫は義を以て良となし、妻は順を以て正となす。

(3) 隨順服從

在家由父、出嫁從夫^(一)。家に在つては父に由り、嫁しては夫に從ふ。

夫乃婦之天、妻乃夫之奴^(四)。夫は妻の天であり、妻は夫の奴である。

上床夫妻、下床君子^(三)。眠床に上つては夫婦であるが下りて来ては主従である。

夫唱婦隨^(一)。夫が唱へて妻が隨ふ。

嫁雞隨雞飛、嫁狗隨狗走^(一)。鶏に嫁入れば鶏について飛び、犬に嫁入れば犬について走る。

隨夫貴、隨夫賤^(一)。妻は夫に隨つて貴くなり、夫に隨つて賤しくなる。

(4) 相談相手としての妻

妻は枕邊人、十事商量九事成⁽³⁾。妻は枕を天下にする人、物事は相談をすれば大概成功する。
丈夫弗聽枕邊言⁽⁴⁾。夫たるものには寝間口説に耳をかしてはならない。

妻子面前莫說真、朋友面前莫說假⁽⁵⁾。妻子の前で本當のことを詫ふな、友人の前で嘘を詫ふな。
(5) 妻の教育

筆記教子、杖遠教妻⁽⁶⁾。子供の教育は堂の前で、妻の教育は寝物語にそへい。子供の教育には數正なる態度を以て、妻を教へ導くには打ち解けた態度を以て臨むべきである。

六、夫婦の種々相

庶民の夫婦生活は千態萬狀である。先づ夫の種々相を見るに、讀書人、百姓、金銀細工屋、ばくち打ち等生業を異にする人を亭主にもつた場合¹、或ひは盲、啞、聾、くされ頭（臭頭）²、偃僂、跛、足の長いもの、短いもの等の不具者を亭主に有つた場合²のユーモラスな姿が俚諺に現れてゐる。年齢は元則として夫が年上であるべきであるが(三)(9)参照)、懸隔が甚しきに失する場合は年寄の亭主は殊の外若妻を大事にする。之に對して妻の方は夫より少しでも年上で

あるとひと倍夫を大事にする。何れにしても年上の方がひけ目を感じるわけである⁽³⁾。夫は剛、妻は柔、夫が唱へ、妻が隨ふのが本來の建前であるが、その逆に夫が妻を恐れ、妻が夫を尻にしくのは、世人の嘲笑的となる⁽⁴⁾。更に妻の方にも賢愚良惡の種々相がある。賢妻は夫を尊敬する。家に賢妻があれば夫が思ひがけない失敗を演じ、思はぬ災難を招くことがない。併し妻が賢いのよりもやはり夫が賢い方がよい⁽⁵⁾。惡妻が六十年の不作であることは既に述べた處である(三、(1)参照)が、妻は結局夫の仕込如何にもよるものであり、いくら氣の強い女房も鐵拳はこはいものである⁽⁶⁾。更に妻の身分は夫の身分如何によるものであるから、夫が金持であるなら妻の威勢もよいのは庶民社會の常である⁽⁷⁾。

(1) 種々の職業の亭主

嫁着讀冊夫、三日無食亦輕鬆⁽⁸⁾。讀書人を亭主にても三日食はなくとも氣はせいせいする。

嫁着做田夫、汗腺臭獻重⁽⁹⁾。百姓を亭主にても汗ぐさくてやりきれない。

嫁着打金夫、打到一頭金墮々⁽¹⁰⁾。金銀細工屋を亭主にても髪一つばいビカ／＼輝る——金銀の髮飾が澤山つけられる葱をさげるが、負けた時は家財道具つかり質屋に入つてしまふ。

爲。

嫁着賭博夫、賭若贏、一手撲肉一手燒葱、賭若輸、當到空々々⁽¹¹⁾。博打うちを亭主にても勝つた時は片手に肉片手に葱をさげるが、負けた時は家財道具つかり質屋に入つてしまふ。

俚諺は現れた臺灣及支那の家族生活

(2) 不良な亭主

嫁着青盲夫、梳頭抹粉無彩工^(一) 盲目を亭主にもてば、髪を梳つても白粉をつけても甲斐がない。

嫁着驪口夫、比手繪刀驚死人^(二) 驪を亭主にもてば手真似足真似で人さわがせをする。

嫁着臭耳夫、講話無聽氣死人^(三) 臭を亭主にもてば詰が聞えなくてやきもきさせられる。

嫁着亢聾夫、瞓着被底能隔空^(四) 佝僂を亭主にもてば、かけた蒲團に大きな洞が出来る。

嫁着跛脚夫、行路若跳羣^(五) 跛の亭主は、歩いてゐる姿は童乩がおどつてゐる様だ。

嫁着矮脚夫、燒香點火情別人^(六) 脚の短い人を亭主にもてば、線香をあけるにも説明をあげるにも他人にたのまなければならぬ。

嫁着矮脚夫、死丁斬脚臘^(七) 足の長い人を亭主にもてば、死なれた時に腿を切つてやらなければならない——長すぎて棺桶に入りきらぬ爲。

嫁着矮脚夫、燒香點火情別人^(八) 脚の短い人を亭主にもてば、線香をあけるにも説明をあげるにも他人にたのまなければならぬ。

(3) 年齢の隔る夫婦、年上の妻

老戲賢打鼓、老夫惜幼某^(九) 老練な役者は鼓が上手、年寄の夫は若妻を大事にする。

老底痛井婆^(十) 年寄の夫は若妻を大事にする。

某大姑、金交椅^(十一) 年上の妻は黃金造の肱掛椅子の様に心地がよい——年下の夫をひと倍大事にするから。

(4) 噴 天 下

(5) 賢 妻

(6) 賢 妻

(7) 賢 妻

(8) 賢 妻

畏某大丈夫、打其猪狗牛^(十二) 妻を怖れるのは大丈夫、妻を打つのは大畜生。

聽某嘴、大富貴^(十三) 妻のいひなりになる亭主は金がたまる。

罷内家豪富、欺妻一世貧^(十四) 女房を怖れるのは金持になり、女房を粗末にするは一生貧乏する。

怕老婆、有飯吃^(十五) 女房を怖れるものは貧乏しない。

癡漢怕老婆、賢女賢丈夫^(十六) 馬鹿な男は女房を怖れ、賢い女は亭主を尊敬する。

好漢不打妻、好狗不咬雞^(十七) 立派な男は妻を打たず、よい犬は鶏をとらない。

(5) 賢 妻

賢女敬夫^(十八) 賢い女は夫を尊敬する。

家有賢妻、如國有良相^(十九) 家に賢妻があるのは國によい宰相がある様なもの。

家有賢妻、夫不吃淡飯^(二十) 家に賢妻があれば、夫は味氣ない、思ひをしなくともすむ。

家有賢妻、男弗遭橫禍^(二十一) 家に賢妻があれば、夫は思ひがけない災難に遭ふことがない。

家有賢妻、丈夫不遭橫禍^(二十二)

家有賢妻、男兒不做橫事^(二十三) 家に賢妻があれば、男は横逆なことをすることがない。

妻賢夫禍少、子孝父心寬^(二十四) 妻がよければ夫に禍が少く、子が孝行であれば父の心は安らかである。

賢婦令夫貴、惡婦令夫敗^(二十五) 賢婦は夫を貴からしめ、惡婦は夫を敗れしめる。

莫能不如夫賢^(二十六) 妻が俐巧であるのは夫が賢いのにしかない。

(6) 悪 妻

強姦娘、只怕打⁽¹⁾ 氣の強い女房も鐵筆はこはあるの。

(7) 金持の夫、金持の妻

男人有錢、女人有勢⁽²⁾ 亭主が金持なら女房は威勢がよい。

丈夫有錢妻有勢⁽³⁾

冬瓜有毛、茄子有刺、丈夫有錢、內人有勢⁽⁴⁾ 冬瓜にうぶ毛があり、茄子に刺がある、亭主に金があれば女房の威勢がよい。

妻有錢、湯麺水⁽⁵⁾

(8) そ の 他

妻肥能使男搜⁽⁶⁾ 妻が肥ければ夫はやせる。

愛某、爲某苦⁽⁷⁾ 妻を可憐がれば妻の爲に苦勞する。

七、死 別

生涯の伴侣を失ふのはこの上ない悲惨事である。妻に死なれて斷腸の思ひをするのが人情であるが、妻の死を好機に衣更し新妻を迎へるものもある。^① これに引きかへて夫を唯一の頼り

にする妻にとつては、夫に死なれることは全く前途のくらやみであり、親の死んだ場合と同じ様に重い喪に服さなければならない。^② 妻にとつては、頼りになるものに置き去られるよりもそれより先に死に、賑やかな葬式を出して貰ふ方が幸福である。そして前世に善行を積んだものにして始めて夫より先に死ぬ幸福に恵まれるといふのである。^③

(1) 妻 の 死

母死衆家喪、妻死割ベ脚⁽⁴⁾ 母が死ねば家中の者が喪に服するが、妻が死ぬのは脚を斷たれる思ひがする。

死某換新衫⁽⁵⁾ 妻が死ねば新しい着物に着かへる——聞もなく後妻を迎へること。

(2) 夫 の 死

夫死三年妻大孝、妻死無過百日願⁽⁶⁾ 夫が死ねば三年の間妻は重い喪に服するが、妻が死んでも思出すのは百日位なものである。

(3) 夫より先に死ぬ幸福

有福夫前死、無福夫後死⁽⁷⁾ 福のあるものは夫より先に死に、福のないものは夫より後に死ぬ。

三世修來夫前死⁽⁸⁾ 三世修行して夫より前に死ぬ——三世善行を積んで始めて夫より先に死ぬといふ幸福に恵まれる。

八、鰥

寡

男と女とが夫婦となつて始めて一人前となり社會の一單位となるものであるから、伴侣に死なれた縁（男やもめ）及寡（女やもめ）は人間として共に片端である。殊に夫を頼りに生きる妻が夫に先立たれるのは、船のない船の様なものである。^① この船のない船に世人は殊に好奇心をもち、焼餅やあせつかいの心も働いて後家についてはとかく取沙汰が多い。寡婦の生活上の弱身につけ込んで誘惑の手を伸すものもあり、長年の清いやもめ暮しもひと時にござる事がある。やもめで通すのは容易なことではない。夫に死別した場合はまだよいが、離縁されたものの即ち生き別れの場合は殊に女につらく、寡婦で終りまで通しにくいのが常である。^② 生計の状態によつて男と女とが異つた態度をとること、即ち男は貧乏して後妻を迎へる資力のないものが男やもめで通すのに引きかへて女は、扶養して下れる男を新に求めなくともすむ程の餘裕のあるもののみがやもめで通すことは、興味深い世相である。^③ 唯一の頼りになる夫を失つた女が浮世に處して行くには一大勇猛心を振ひ起さなければならない。その爲にやもめの心はだん／＼頑になり、冷酷になる。そして役人と顧客と共に後家は、うつかりさはつたり逆つたりしてはならないものに數へられてゐる。^④

(1) 縁寡は片端

無能之舟^(四) 能のない船——寡婦のこと。

(2) 寡婦に取沙汰が多い

寡婦門前是非多^(三) やもめの家には是非が多い——取沙汰が多い。

要守得清、要嫁嫁得明^(大) やもめで通すならやもめらしく、再婚するならばつきり再婚するもの——行動の曖昧なやもめを諷刺する言葉。

三十年裏婦碧波清、河泥船插過一時潤^(三) 碧をたゞぐる波の様に清い三十年間のやもめ暮しも、通る船に揺れて泥が立てば一べんににごる。

死裏易守、活裏難熬^(大) 死別のやもめは守り通せるが生き別のやもめは守り通せない。

(3) 貧乏男やもめ、金持女やもめ

窮義夫、富節婦^(二) 見上げた男やもめは貧乏、立派な女やもめは金持——金さへあればさつさと後妻を迎へるのであるがその資力もない程貧乏してゐる男のみが見上げた男やもめ（義夫）として亡妻に忠實である。之に對して、夫に死なれても食ふに困らない程の金を有つてゐる女のみが、やもめとして亡夫に貞節を盡すことが出来るのである。

窮單身、富寡婦^(三) 男やもめは貧乏、女やもめは金持。

(4) やもめの心

寡婦心腸、晚娘手段^(三) やもめの心、戀母のやり口——共に苛酷辛辣なもの。

一等官、二等客、三等寡婦惹不得^(三) 逆つてならないもの三つ、第一に役人、第二にお得意さん、第三にやもめ。

九、再 婚

片端な鳏寡の生活をひと度の生活に戻す爲に再婚が行はれる。併し再婚はやはり不自然なものであり、しつくりしないものである。殊に夫婦共に再婚である場合は味氣ないもので、お互に便益のあるうちは一緒になるがそうでなくなるとあつさり別れてしまふ。^① 女に比べて男は手軽に再婚する。そして新しいものゝありがたさから後妻を大事にし、従つて弱味につけ込まれて押へられる場合が少くない。^② 女の再婚は併しそれ程簡単ではない。第一に女、殊に立派な女は再婚をしないのが建前でする。^③ 尤も生活上のことや一身上の都合で總ての女に立派な女たることを強ひることが出来るものでないから夫の死後に於ける女の身のふり方は本人の意志に任すのが普通である。^④ だが結局女は再婚しないのがやはりよく、再婚する女はよくない女悪い女と謂はれるのが常である。^⑤

(1) 再婚は幸福を齎さない

有錢切莫娶後婚、一個床上兩條心^(三) 金があつても再婚の女を貰ふな、寢床は同じでも心は別々である。

後婚老婆後婚漢、有了吃沒了散^(三) 再婚の夫に再婚の妻、食へる内は一緒だが食へなくなるとあつさり別れる。

(2) 男 の 再 婚

頭妻嫌、二妻愛、三妻願叫祖奶奶^(三) 初婚の妻は毛ぎらひん、再婚の妻は可愛いがり、三度目の妻は櫛の上にまつり上げる。願叫祖奶奶はおばあさんとよぶのをも厭はないこと。

前某打到死、後某不甘比^(一) 先妻はなく殺すが後妻は手をぶれもしない——大事にするのあり。

(3) 女は再婚しないのが建前

一女不嫁二夫^(二) 女は二度目の夫にまみえないもの。

烈女不嫁二夫^(二) 貞女は二人の夫に嫁入らないもの。

忠臣不事二君、貞婦不事二夫^(四) 忠臣は二君に仕へず、貞女は二夫に仕へない。

好馬不吃回頭草、好妻不嫁二丈夫^(五) よい馬は適もどりして草を食ふことなく、よい妻は一人の夫に嫁入らない。

(4) 女の再婚は自分の意志を決める

初嫁從親、再嫁由身^(三) 初婚は親の意見に従ひ、再婚は思ふ様にする——本人の意志で決定する。

(5) 再婚するのは悪い女

再刷無好布、再嫁無好婦^(三) そめなほしたものによい木地がなく、嫁入りなほしたもんによ、女はない。

三離婦人不是人^(三) 三度嫁入りなほした女は人でない。

死了前夫嫁後夫、一步高一步^(四) 前の亭主に死なれて後の亭主に嫁に入る、一步一步と高く上つて行く——再嫁の後家を諷刺する言葉。

過婚嫂、連夜討⁽¹⁾ 再婚の花嫁さんは話がまとあればすぐ迎へよ——さもなければもうと條件のよい處へ行つてしまふ恐れがあるから。

一〇、妾

妾は家庭に風波を起し家を衰へさせるものであり、貰ふべきものではない。¹ 又女として
は、たとひ貧乏人に嫁入り粥をすゝつても萬々金持の妻になるものではない。² 家族間に於ける妾の地位は極めて低いもので、家事に當つてもうまくさばけないのが常である。³ 妾は子を生んでも正妻のものになつてしまふ。⁴

(1) 妾は風波の原因、貰つてはならない

若要家不和、討個小老婆^(江蘇) 家に悶着を起さうと思へば妾を貰へ。

若要家不和、娶個小老婆^(三)

家欲齊、賣兩型、家欲破、賣兩妻^(一) 家を齊へやうと思へば二張の型を賣くがよい、家を破らうと思へば二人の妻を賣くがよい。

一妻無人知、二妻相舍事^(二) 妻が一人の時は誰も知らないが、二人になると恥も外聞もなく皆さらけ出される——本妻と妾とがいがみ合ひ喧嘩するど恥を皆さらけ出す。

(2) 女は妾になるものでない

寧賣老驥推磨、別買小婦作禡^(三) 妻を買つて禡の種子をあくより老ぼれの醜馬を買つて臼を挽かずがよい。

吃醋不討小^(四) 女房が焼餅やきなら妾を賣ぶな。

(3) 妻は妾になるものでない

嫁擔葱賣菜、不嫁半平婿^(一) 貧しい行商人に嫁つても妻になるものでない。擔葱賣菜は葱を擔ひ野菜を賣る行商人。

半平婿は半人前の婿——他人(本妻)が半分を占めてゐるから。

挑柴賣草、不跟人家做小^(二) 薪を擔ひしばを商つても他の妻にはならない。

寧與窮人補破衣、不與富人做偏房^(三) 貧乏人の爲に縫縫を縫つても金持の妻にはならない。

寧可爲窮人補破衣、豈肯與富人爲妾妻^(三)

寧到山中變鳥、不在房中做小^(三) 山の中に入つて鳥に生れ變つても他の家で妻にはならない。

寧爲房上鳥、不作屋裏妻^(三) 屋根の上の鳥になつても家の内の妻にはならない。

做花不做夾竹桃、做人不做人細婆^(福州) 花になるなら夾竹桃になるなる、人になるなら妻になるな。

(3) 妻の地位は低いもの

小婆當家沒主張^(三) 妻が家事に當つてもらちがあかぬ。

(4) 妻の子は本妻のもの

細嬌生子大某的^(一) 妻が子を生んでも本妻のもの。

妻有大小、子無嫡庶^(三) 妻に本妻妻の邊だあつても子には嫡庶の區別だない。

一一、婚姻に伴ふ家族及姻族關係

結婚によつて新に結ばれた男女の家族の間に新しい社會關係が發生する。之を次の四つの方面について見ることが出来る。

- (イ) 妻の婚家に於ける家族關係
- (ロ) 妻とその生家(里)との關係
- (ハ) 夫と妻の里方との關係
- (二) 男女兩家の關係

(イ) 妻の婚家に於ける家族關係

妻が婚家に於いて密接な交渉を有つのは夫の父母(舅、姑)、夫の姉妹(大姑、小姑)及夫の兄弟(大伯、小叔)並にその配偶者(大嫂、小嬢)であつて、その内でも姑と小姑とが最も問題の存する處である。夫の父即ち舅とは接觸すること比較的に少く、さして困難な問題はないが、夫の母即ち姑とは密接な關聯を有し、相離れないものである。¹『媳と姑、犬と猿』、『媳姑

の仲のよきはもつけの不思議』と我國でも昔から謂つてゐるが、支那臺灣に於いても姑と媳とは殆ど本能的に相反撥するものである。そして『坊主憎けりや袈裟まで』の心情にもれず、媳にとつて『姑が憎けりや夫まで憎』くなるのに對して、姑にとつては媳が憎ければ自分の息子まで憎くなるのである。² だが家族間の地位からして媳が姑に手むかひ口答へすることは出来なく、姑が媳をたゞくのはあへて珍しいことではない。³ 尤も姑の口がうるさすぎれば媳の耳にたこが出來てつひには反響がなくなるが。⁴ 婚家に於ける媳の立場は全く氣の毒なもので夫の氣に入れば姑の氣に入らず、姑の氣に入れば夫の氣に入らない有様である。併し媳たるものも徒に悲歎にくれる要はなく、時がたてば媳がやがて姑になり、權威を以て媳に臨む日がめぐつて來るのである。⁵ 尚姑といつても、媳より後に家に入つて來た父(舅)の後妻に對しては、先輩格の媳はさして遠慮もしないものである。⁶

姑だけでも媳にはたへられない壓迫であるが、之に大姑小姑が加ふるに至つては媳たるものには竝大低ではない。小姑鬼千匹と謂はれるが、支那では小姑は閻魔様よりも怖いものである。小姑が多勢居ればそれだけ悶着が多く、殊に本來關係のない筈の小姑が母即ち媳の姑の勢力にかくれて嫂の事にかれこれ干渉するに至つては全く悲劇である。⁷ 小姑が小姑なら嫂も嫂で、

之を望ましくない存在とし日のかたきとしてあしらひ、そのかたづくのを見てほつとするのである。

臺灣では夫の兄を大伯といひ、夫の弟を小叔といふ。媳とは直接交渉をしないのが元則であるが、それでも大伯が大勢居ればそれに禮貌をつくらう煩はしさにたへず、小叔が多ければ殊にそれが未婚者であれば、その身のまはりの面倒を見なければならぬ。

(1) 妻と男姑

媳不離婆、稱不離鉢⁽³⁾ 秤に鍔がつきものであり、媳に姑がつきものである。

(2) 姑は媳を憎む

有媳婦講媳婦兒、無媳婦講一隻老鷄婆⁽⁴⁾ 媳が居れば媳の棚下しをし、媳が居なければとりとめのない話をすむ。

娶了老婆愛了心⁽⁵⁾ 女房を貰つて心が變つて了ふ——姑が媳につらく嘗つてそれでも足りないで息子に當る時に謂ふ。討了媳婦賣了仔⁽⁶⁾ 母を貰つてかへつて息子をなくした——息子が媳の肩をもつて自分の意見に従はない時に謂ふ。

(3) 姑は始に服従するもの

大姑有嘴、媳婦無嘴⁽⁷⁾ 姑に口があつても媳に口がない——やかましく謂はれても口答へすべきでない。

婆々打媳天下有⁽⁸⁾ 姑が媳をたゝみのはありふれたこと——珍しいことでない。

(4) 姑がうるさすぎれば媳はきかなくなる

姑口煩而婦耳頑⁽⁹⁾ 姑の口がうるさければ媳の耳にたこが出来る。

婆々嘴碎、媳婦耳歪⁽¹⁰⁾ 姑が口がさける程うるさく小言を謂へば、媳の耳がまがつて之を聞かなくなる。

(5) 姑にも姑になる日がある

起草辱罪丈夫、起草得罪公婆⁽¹¹⁾ 早起すれば夫が喜ばず、朝寝すれば舅姑が喜ばぬ。

堂前椅子輪流坐、媳婦也有做婆時⁽¹²⁾ 麟堂の前の椅子は代りばんに腰かけるもの、媳にも姑になる時がある。

念年新婦念年婆、再掀念年做太婆⁽¹³⁾ 二十年の間は媳さんで二十年の間は姑さん、更に二十年たてばおばあさんになる。

三十年古路熟成河、三十年媳婦熟成婆⁽¹⁴⁾ 三十年たつ古い道は河になり、三十年たつ媳は姑になる。

多年媳婦熟成婆、多年道兒熟成河、多年和尚熟成佛⁽¹⁵⁾ 長年の媳さんは姑さんになり、長年の道は河になり、長年の坊さんは佛さんになる。

(6) 再婚の姑

先來新婦晚來婆、要餽要飯自來提⁽¹⁶⁾ 先に嫁入つた媳さんに後に嫁入つた姑さん、御飯がほしければとりにおいて——前者は後者に迷惑しない。

先來新婦、不怕慢來婆⁽¹⁷⁾ 先に來た媳さんは後から來た姑さん(舅の後妻)に迷惑しない。

(7) 小姑は媳の鬼門

二姑之間難爲婦⁽¹⁸⁾ 大姑(夫の姉)と小姑(夫の妹)の間に立つて媳たるものほづらい。

大姑大似婆、小姑賽閻羅^(山東) 大姑(夫の姉)は姑位にいばり小姑(夫の妹)は閻魔よりもおそろしい。

俚諺は現れた臺灣及支那の家族生活

小姑多、舌頭多、大姑多、婆々多(三) 小姑が多ければ口數が多く、大姑が多ければ姑が多い。

姑娘嫌媽醜、枉作冤枉仇(四) 兄嫂の顔(五) などとお嬢さんがいつたりするのは、徒に無駄なうらみを結ぶわけ。

(8) 小姑は娘の目のかたき

拔去蘿蔔地皮寶、嫁出姑娘阿嫂賣(三) 大根を抜いてしまくば地面ぶくつろぎ、小姑を嫁に出せば兄嫂はほつとする。

(9) 夫の兄弟（大伯小叔）

嫂叔不通問(三) 兄嫂と弟とは應對しないもの。

小叔多、鞋脚多、大伯多、禮貌多(三) 弟が多ければ鞋など面倒を見ることが多い、兄が多ければ餘計禮貌をつくらなければならぬ。

(口) 妻とその生家との關係

姑と小姑とがにらみをきかしてゐる婚家が煩はしければ煩はしいだけ、媳にとつて我儘のいへる生みの親の膝元（里方）がなつかしい。母にすれば元々血を分けた娘であり、それが婚家でいぢめられでもしたら餘計いたはしくなる。可愛い娘を憎い媳にひき比べる時、殊にその娘が嫁入り前に憎い媳に對して共同戰線を張つて下れたものなら、憎い媳を前にしてそれだけ可愛い。娘を愛する心は娘の子（外孫）に迄及ぶ。元々遠い間柄であり、心をいためても甲斐な

いものであるが、外媽にとつて外孫はむやみに可愛いものである。¹

女は元來他處にかたづけられるものであり、他家人となるものである。いくら里の飯があいしくともながくそれを食べるわけには行かない。又その一身のことも婚家の盛衰浮沈によつてきまり、里の財産は頼りになるものではない。したがつて里方がしたはしくとも漸次婚家の生活に深く纏込まれ、里方と次第に疎くなるのが自然の勢である。つひには生みの親の在世中は里へも歸るが、それが世を去ると往々來もしない様になつてしまふ²。

(1) 外 媽 外 孫

悉遷母野鴨孫、悉外媽痛外孫(三) おひとよしの雌鴨、家鴨の卵をかへす、おひとよしの外媽、外孫を可愛いがる。

(2) 妻 と 里 方

娘家的飯香、婆家的飯長(三) 里の御飯はおいしいが婚家の御飯は末ながい——里の飯は時たま食べるものの、婚家の飯は一生食べるもの。

外氏供不老、痴脚障不好(三) 半身不隨は治せないもの、里で一生暮すことは出來ないもの。

隔夜飽、只是餉、娘家好、只是好(三) 前の晩の満腹は只の満腹(五) すきない（今夜のひもい思ひのたしにはならない）、里の金持は只の金持にすぎない（婚家でそわに預ることは出來ない）。

有婦有娘常々歸、無弟無娘水不來(三) 父母が生きてゐる間は里へ時々歸るが、兩親がなくなれば歸らなくなる。

(ハ) 夫と妻の里方との關係

岳父にはそれ程でもないが、岳母にとつては婿はムツといふ程可愛いものである。¹ 血を分けた我が娘の生涯の伴侶である婿は半ば子の様なものである。² 併し婿はやはり婿で子の代りになるものではない。子のあるものは子に頼り、子のないものにして始めて婿を頼りとする。³ 婿の方では、妻が可愛いければ可愛い程、岳父岳母を敬愛する様になる。そして母方の親戚よりも妻方の親戚を大事にする様になりがちである。⁴

(1) 婿は可愛いもの

丈母賤、好七桃^{（フ）} 岳母の家はたのしいもの、——岳母が大事にもてなして下れるので。

丈母看女婿、越看越中意、丈人看女婿、越看越憮氣^{（ミ）} 岳母が婿さんにあつて見れば見る程可愛くなり、岳父が婿さんにあつて見れば見る程腹が立つ。

(2) 婿は半ばは息子の様なもの

子婿半子^{（ヒ）} 婿は半ば息子の様なもの。

女婿爲半子^{（ヒ）}。

(3) 婿は子の代りにならぬ

(4)

女婿當不了兒郎、舊婆當不了陳輝^{（ミ）} 婿は息子の代りにはならぬもの、舊婆はふるごめの代りにならぬもの。
有兒難兒、無兒難婿^{（ミ）} 息子が居れば息子に頼り、息子が居なければ婿に頼る。

(4) 妻の爲に岳父岳母を敬ふ

因爲媳婦拜丈人^{（ミ）} 媳さんの爲に岳父におじきをする。

愛妻敬丈母、愛子敬先生^{（ミ）} 妻が可愛いければ岳母を敬ひ、子が可愛いければ先生を敬ふ。

媳婦親戚炕頭坐、婆々親戚門前過^{（ミ）} 女房の親戚は座敷に上げ、ばばあの親戚は素通りさせてく。母方の親戚を疎んじ妻方の親戚に厚くするものを諷刺する言葉。

(二) 男女兩家の關係

支那の庶民社會に於いて媳の虐待は相當深刻な問題である。媳が死亡した時はすぐにその里方に通知し、虐待で殺したものでない事を確めて貰つて始めて棺に收めるのである。里方は往々にして虐待して殺したものと難癖をつけて悶着を起すこともある。いつれにしても媳を中心として兩家に問題の起るのは少くないので、怜巧な媳ならつけ口をしないでよいあんぱいに兩方にかくし両方を賺かしてつくろつて行く。夫及妻の親は互に親家と稱する。互に可愛い息子娘と一緒にさしたものであから本來非常に懇意な間柄である筈であり、又事實さうであるが併

し同時に互にけむつたい存在もある。したがつて親家同士は互に周到な用意を以てつきあひ、客としては一番大事な客であり、禮節を缺くことの出来ないものである。そして氣まづい思ひをかもさない爲に金錢上の交渉を結ぶのをさくべきものとしてゐる。

(1) 兩家の關係

會做媳婦兩頭曉、不會做的兩頭懵^(三) 楠巧な娘は兩方にかくし、馬鹿な娘は兩方につけ口をする。
好女兩頭遞、遞了郎家庶外家^(三) 楠巧な娘は兩方におしかくす、嫁家にもかくし里にもかくす——おしかくして兎角^{反目}
しがちな嫁家と里との仲を工合よく調停する。

(2) 親 家

除了親家無大資^(三) 親家の他に大事な客はない——親家こそ最も大事な客。

隔離親家、禮數尤在^(三) むく隣りに住んでゐやうとも親家への禮節は缺かされない。

親家交禮不交財^(三) 親家同士は禮節上の往き來があつても金錢上の往き來はしないもの。

第三 親 子

一一、親 子 夫 婦

親子夫婦は家族の最も基本的な構成員であり、その間柄は最も緊密である。愛情がこまやかなのは謂ふ迄もないが、それだけに深刻な摩擦衝突も多い。親は子で苦勞するもの夫婦は互に苦勞するもの、いはば前世からのくされ縁があればこそ、恩愛の絆で結ばれてゐるのである。處で同じく恩愛の絆で結ばれてゐるもの間にもその間柄に又遠近疎密がある。金や物でもねだる時には、父よりも母の方が、母よりも更に妻の方がねだり易い。これは妻が最も遠慮のいらない相手であり、その次が母であり更にその次が父であることを物語つてゐる。又假りに親が死亡したとする。臺灣ではその際身内のものが皆聲を出して泣くことになつてゐる。處が同じく聲を立てゝ泣いても心情はまちまちである。息子は天地に轟かんばかりに悲歎にくれるが、娘が泣くのは偽の涙である。未だ嫁に出ない娘は心底から哀切な涙を流すが、婿に至つては驢馬の放つた屁の如くにへへへと二つ三つ申譯に聲を立てるのみである。之は親に對する息子、娘、婿の親近さを物語るものである。^②

(1) 親子夫婦はくされ縁

不是冤家不成男女、不是對頭不成夫婦^(四) 前世の仇同志でなければ男女に生れて來ず、前世の仇同志でなければ夫婦にならない。

兒女夫婦冤怨縁⁽³⁾ 児子夫婦はくされ縁。

(2) 親子夫婦の間柄

爺有弟如娘有、娘有弟如老婆有、老婆有還要開々口、媳弟如自己有⁽³⁾ おやぢが有つてゐるよりもお袋が有つてゐる方が工合よく、お袋が有つてゐるよりも女房が有つてゐる方が工合がよい。女房が有つてゐても頭を下げなければならないから、結局自分が有つてゐるのが一番よい。

兒子哭、驚天動地、媳婦哭、虛情假意、閨女哭、真心實意、女婿哭、黑驕放屁⁽³⁾ 息子が泣けば天地に轟き、娘が泣くのは僞の涙、娘が泣くのは心の底から、婿が泣くのはうほの空。

一三、親子の關係

(イ) 親子の間柄

親子の間柄といつても父と子、母と子とで趣を異にしてゐる。父と子とは至親の間柄と謂はれる。この『至親』は『最も親しい』といふことよりも『最も親身になる』ことを意味するものである。即ち父が亡くなつた時子は天地に轟くばかりに泣き悲しむものであり、又危険に身をさらした場合、父は我身よりも子を、子も又我身よりも父を庇ふ間柄である。さればこそ戦争

などで親子が一隊になつてゐる兵隊を敵にまはすのは、かなはないことである。『至親』が『最も親しい』或ひは『遠慮のいらない』ことを意味する場合、郎舅（舅は母親の兄弟、それに對するものが郎）或は友人が至親の間柄と謂はれる。¹ 父子の間柄は至親であり絶對的であつて、たとひ父に過失があり醜惡なことがあつても、子は之を外聞にしないものである。之は子の道德上の義務であるのは勿論であるが、又親子の間柄から子は自然にさうするものである。²

父と子とは親しい中にも尙嚴然たるものがあるが、母と子になると兩者は無條件にとけ込んでゐると謂つてよい。母と子とは相離れないものであり、日が暮ると小さい子は本能的に母親をさがし求める。³ たとひ醜い母親でも子にとつてはすぐに懷にとび込めるものであり、かけがひの無いものである。⁴

(1) 父と子とは至親の間柄

至親莫如父子⁽¹⁾ 父と子とは一番親身な間柄。

(至親莫若郎舅⁽²⁾) 一番親しいのは郎と舅。舅は母の兄弟、それに對するのが郎。

(至親不如好友⁽³⁾) 一番親しいのは親友。

出陣不當父子兵、相打不當親兄弟⁽³⁾ 戰では親子の兵隊にかなはない、喧嘩では血を分けた兄弟にかなはない。

但謹は現れた臺灣及支那の家族生活

(2) 子は父の恥をさらさぬもの

子不揚父醜⁽³⁾ 子は父の恥をさらさぬもの。

子不言父過⁽³⁾ 子は父の過失を言はないもの。

子不談母醜⁽³⁾ 子は母の恥をさらさぬもの。

(3) 母と子とは相離れない

母子不相離⁽³⁾ 母と子は相離れない。

日頭亡、子尋娘⁽³⁾ 日が暮ると子供は母親をさがし求める。

日頭上牆、孩兒找娘⁽³⁾ 日が傾くと子供は母親をさがし求める。

(4) 子は母の醜いのをいとはない

兒不嫌母醜犬不厭家貧⁽³⁾ 子供は母の醜いのを嫌はず、犬は家の貧しいのを厭はない。

子不嫌母醜、狗不嫌家貧⁽³⁾

(反)

親父子、明算帳^(江蘇) 血を分けた親子でも勘定は又別、——勘定をばつきりさせなければならぬ。

(口) 親 の 愛

人として子を愛さないものはなく、又孫を愛さないものはない。殊に母親にとつては、子は我が身に連るものであり、我が肉、我が命、我が心である。給付には反対給付をし損益の均衡を図るのが社會生活の通則であるが、親子の場合だけはさうではない。『返し』を全然念頭におかずには親は子の爲に總ゆる努力をする。さればこそ一般的な社會生活から見て一番引合はないこと、一番馬鹿げたことは親になることである。¹ 賢愚の差、善惡の別があつても子を愛する心はひとつである。たとひ無類な惡漢であつても、子を愛する心には變りはない。いくら獰猛であつても自分の子を食ふ虎はない。世の中には悪い人は居ても悪い親はあるものである。²

子を愛する親の心は絶對的であると共に又普遍的である。十本の指に長短の差があつても等しく我が心に連つており、どれを咬んでも痛いのと同じ様に、息子達に智愚善惡の差があつても親にはいづれも變らぬ可愛い子である。³ 尤も皆可愛い内でも特に可愛いものが居ることも否むことが出來ない。従順な子を特に可愛いがるのが人情であるが、又特に父母は末子を、祖父母は長孫を可愛いがるものである。⁴

(1) 親は子を可愛いがるもの

誰家父母不惜子、誰家公婆不惜孫^(一) 子を可愛いがらない父母があらうか、孫を可愛いがらない祖父母があらうか。

誰人父母不惜子、誰人公婆不惜孫^(二)

兒是娘的通心肉^(三) 子は母親の心に通る肉。

兒肉、兒命、兒心肝^(四) 子は我が肉、我が命、我が心。

第一頬、做老子^(五) 一番馬鹿なのは父親になること。

(2) 悪い親は居ない

天下無不是的父母(杭州) 世の中に悪い親は居ない。

虎母雖歹、無連虎子咬食^(一) 豹虎は如何に猛惡でも自分の子まで食べてしまふ」とはない。

虎雖刦、無拿子咬食^(二) 虎は禪猛であるが、自分の子を捕へて食ふことはない。

虎永無咬子的理^(三) 虎でも自分の子を咬む理はない。

虎不食兒^(三) 虎は自分の子を食はない。

虎毒不吃子^(三) 虎は悪くとも自分の子を食はない。

(3) 子は皆一様に可愛い

十指有長短、痛惜皆相似^(一) 十本の指に長短があつても可愛いのは皆同じ。

十指連心^(二) 十本の指はそれとも心に連つてゐる。

十個指頭、咬々個々痛^(三) 十本の指はどれを咬んでも痛い。

十個指頭、隻々癆^(三)

(4) 末子長孫を殊に可愛いがる

爹娘痛的順心兒^(一) 親は從順な子を可愛いがる。

父母憎細子、公嬪憎大孫^(二) 父母は末子を可愛いがり、祖父母は長孫を可愛いがる。

父母痛小子、公媽痛大孫^(二)

娘憎細兒^(三) 母親は末子を可愛いがる。

尾仔龜異珠、又好愛、又好獎(福州) 末子は異珠、眺めて可愛い、さわつても可愛い——末子は殊に可愛い。

(八) 親 の 心

等しく人間の人間に對する心ではあるが、子に對する親の心だけは格別である。他人の子は觀音様の様にきれいでも見てゐてにくらしくなるが、自分の子は如何に無様でも見れば見る程をかしくて可愛くなる。女房はとかく他人のがよく見えるが、子だけは斷然自分がよい。親の心は親馬鹿だけでなくこの上に更に親の慾目といふがある。自分の子が他人よりすぐれてゐても決してそれで満足せず、この上に更に出世することを望む。子が既に一人前になつて來り、他に比べてあへてひけをとるものでなくとも親の目から見れば未だ／＼であり、もうと／＼

進出發展しなければならないものである。この心理が昂じてつひには、放蕩息子になつても惡事を働いてもよいから佛様の様な能なしの子になつて下れるな、といふことを望む様になる。^② 緊密な親子の間柄であるから親でなければ分らない事も多く、子を知ることにかけては父親に及ぶものはない。^③併し同時に親馬鹿、親の慾目を以てしては到底子の真相を冷靜に觀察することが出来なく、子の惡を知る親がないと謂ふのも又眞理である。^④

(1) 親 馬鹿

別入仔、像觀音、莽着莽惻心、自家仔、像草鞋、莽着莽好笑(福州) 他人の子は觀音様の様にきれいでも、見れば見る程にくらしくなり、自分の子は草鞋の様に無様でも、見れば見る程をかしきて可笑い。

兒子自己的奸、娘子別人的奸^(三) 子供は自分がよく、女房は他人のがよい。

(2) 親 の 慾 目

羅子成龍^(三) 子が龍になるのを望む——子の出世を望む親の心。

生男如狼、猶恐如羊、生女如鳳、猶恐如虎^(三) 息子は狼の様に禰猛であつても尚羊の様に大人しいのではないかと心配し、娘は鳳の様に淑やかであつても尚虎の様にあはれるのではないかと心配する——息子は出来るだけ元氣に、娘は出来るだけ淑やかにと望む親の心にきりがない。

寧馨賊子、不養廢兒^(一、三) 盜人になる子を育てゝも愚鈍な子は育てたくない。親は子の柄巧などを望む。惡智識に長けて

惡事を働くことがあつても馬鹿な子よりはましだとする親の心。

寧可養個賊、不可養尊佛^(三) 盜みをする子を育てゝも佛様の様な能無しは育てたくない。

寧生敗家子、莫生痴默兒^(三) 家をつぶす放蕩息子を生んでも馬鹿息子は生むものでない。

寧可養頑子、不可養痴子^(三) 頑固な息子を育てゝも馬鹿息子を育てるな。

(3) 親は子の人柄を知る

知子莫若父、知臣莫若君^(二) 子を知るに父に若くものはない、臣を知るに君に若くものはない。

知子莫若父、知弟莫若師^(二) 子を知るに父に若くものなく、弟子を知るに師匠に若くものはない。

(4) 親は子を知らぬ

人莫知其子之惡^(二) その子の惡を知るものはない。

(二) 子 の 心

親が子を思ふこと切なのに引きかへて子はそれ程に親を思はないものである。親の心には未長く子があるので、子は膝もとに居る間は親になじんでも成人すれば離れ去つてしまふ。我が子を育てる時は、美味しいものを出来るだけ澤山食べて貰はうと念ずる親の心に引きかへて、親を養ふ時に、胸算用するのが世の常である。^① 結局子は眼前のたのしみのみで果敢無いもので

ある。^② そして子が自分の子を育てゝ苦勞し、やるせない思ひをさせられて始めて親の苦勞、親の慈愛、親の恩がつくづく身にしみて来る。^③

(1) 子はそれ程に親を思はない

只有慈心爹娘、沒有慈心兒女⁽¹⁾ 子を思ふ親はあるが親を思ふ子はないもの。

只有憶偏長、沒有憶靠娘⁽²⁾ 子を思ふ心はあるが親を思ふ心はない。

娘肚內有子、子肚內沒娘⁽³⁾ 母の胸には子があるが子の胸には母がない。

娘想兒、長江水、兒想娘、扁擔長⁽⁴⁾ 母が子を想ふのは長江の流れの様に未長く、子が母を想ふのは擔棒程の長さ。

父母愛子長流水、子愛父母樹尾風⁽⁵⁾ 親が子を愛するのは梢を吹く風の様にはかないもの。

三年乳哺長懷抱、長大成人各自開⁽⁶⁾ 三年の間乳を飲ませ懷に抱きしめても、大きくなり大人になれば離れ去る。

飼子無論飯、飼父母算額⁽⁷⁾ 子を養ふ親は飯を惜まぬが親を養ふ子は胸算用をする。

(2) 子ははかないもの

兒女乃是眼前歡⁽⁸⁾ 兒女は眼前のたのしみのみ。

兒孫心上影、天道暗中燈⁽⁹⁾ 子や孫は心の中の影、天道はくらやみの中の證明。

(3) 子をもつて知を親の思

養子方知父慈⁽¹⁰⁾ 子を育てゝ始めて父親の慈愛を知る。

養子方知父母恩(廣東) 子を育てゝ知る親の恩。

雙手抱孩兒、憶着父母時⁽¹¹⁾ 雨手に赤子を抱いて始めて父母の事を思ひ出す。

(ホ) 親子の類似

子は父母の内どちらかに餘計似るものであるが、親は自分に餘計似る子を可愛がりがちである。息子でも娘でも父に似る方がよいと謂ひ或ひは母に似る方がよいと謂つて、庶民の家族生活に色々とほこえましの取沙汰がある。^①

(1) 親に似る

像爺兒子有飯吃、像娘女兒有衣穿⁽¹²⁾ おやぢに似る子はおまんまにありつき、おぶくろに似る子はおべゝにありつく。

子像娘、贏錢王、子像爺、頗似範⁽¹³⁾ 母親に似る子はよく稼ぎ、父親に似る子はなまけもの。

兒子像娘、大發一場⁽¹⁴⁾ 母親に似る娘は金がたまる。

女像娘、沒坐場、女像爺、涼傘遮⁽¹⁵⁾ 母親に似る娘は身の置き處がなく、父親に似る娘は出世する。

一四、父 母

親子の關係は更に之を父母の方から或ひは子の方から眺めると一層明瞭になる。第一に子は

父母にとつて缺かされないものであるが、それにもまして父母は子にとつて缺かされないものである。子のないものは淋しい乃至は老後の頼りがないのみであるが、親のない子はこの上ない不幸である。¹ 更に兩親の内でも父よりも母の方が子にとつて大事であり、どちらかを捨てなければならぬもののなら母よりも父を捨てるものである。² いづれ他家に嫁入るべき運命にある娘と親との關係は、息子程に緊密でなく、親が生きてゐるなら嫁入の仕度がよく、又嫁入りした娘が居れば親の葬式が賑になる、といふ程度のものにすぎない。³

(1) 子に親がないのは不幸

寧叫父母缺兒女、不叫兒女缺父母⁴ 親に子を缺かせても子に親を缺かせるな——後者がずつとかはいそうである。

(2) 父よりも母が大事

毛郎罷、苦一下、毛娘、苦透底(閩北) 父親がないのは暫くの苦勞、母親がないのは一生の苦勞。毛は無。郎罷は父。娘娘は母。

不捨作花子的娘、寧捨作官的爹⁵ 役人になつてゐる父親を捨ても乞食をしてゐる母親は捨てないもの。

(3) 親と娘

好爹媽、好親事、好女兒、好葬事⁶ 親がよければ仕度がよく、娘がよければ葬式が賑である——よい親なら娘の嫁入仕度をよくし、よい娘なら親の葬式を賑にする。

一五、子

子は老後の頼りとなるものである。娘はいづれ他家にかたづくものであるが息子は父の代り、娘は母の代りをつとめるものである。¹ 従つて子さへあれば老後の事は先づ安心である。子さへあれば貧乏してもあへて心配する必要なく、又たゞ金持であつても子がなければ本當の金持とはいへない。² 息子が大勢居るのは人生の幸福の一つのシンボルであり、子がないからさつぱりしてよいと自慢してもそれは瘦我慢に他ならない。³ 子が多いのが幸福といつてもどら息子ではかへつて苦勞の種子で、よい息子でなければかへつてない方がましである。尤も世間には得てどら息子が親孝行をすることもあるが。⁴

息子は樂みである一方、心配の種子苦勞の種子もある。第一に一人前に育て上げるに相當費用がかゝる。⁵ 殊に可愛い子を育てる心勞苦勞は筆舌に盡せないものであり、それに比べれば子のないのがどれ程樂か知れない。⁶ それも一男一女位ならまた花であるが、子が多くれば多い程苦勞が多く、つひには子供地獄に陥つた様なものになる。⁷ 又子は小さい時は比較的に親のいひなりになるが、大きくなれば親の思ふ様にならず、子の體を生むことは出来ても子の心

を生むことは出来ないといふ嘆きも出る。なくてはならないものであるがもつては苦勞するものであり、結局子は何ともいへないものである。

(1) 子は老後の頼り

養兒防備老、種樹圖蔭涼(一) 子を育てゝ老に備へ、樹を植えて涼しい蔭にありつく。

養兒待老、積穀防饑(二) 子を育てゝ老後に備へ、穀物を蓄へて飢饉に備へる。

養兒防老、積穀防荒(江蘇)

飼後生、養老妻(一) 子を育てゝ老妻の時に備へる。

飼後生養老妻、飼査某子別人的(一) 息子を育てれば老妻の時の備へとなるが、娘を育てゝも他家のものになる。

飼後生替老父、飼媳婦替大家(二) 子を養ふのは父の代りをさせる爲、娘を養ふのは姑の代りをさせる爲。

(2) 子あれば安心

有子萬事足、無官一身輕(一) 子があれば縕て事足り、官職に就かなければ一生身軽である。

有子萬事足、無錢一身輕(二) 子があれば縕て事足り、金がなければ煩しい思ひをしなくともすむ。

有屋不怕寒露風、有子不怕老來窮(三) 家があれば寒露の頃に吹く寒い風も恐れるに足らず、子があれば老後の貧乏もあへて心配することはない。

有子之人貧不久、無子之人富不長(一) 子のある人は貧乏しても長くことはなく、子のない人は富んでも長くはない。

有錢無兒不算富(五) 金があつても子が無ければ金持の部に入らない。

有兒不啻貧(五) 子があれば貧乏の部でない。

有兒無錢不啻貧(五) 子があれば錢がなくとも貧乏の部でない。

多子不認窮、少子不如無(一) 子供が多ければ貧乏もあるべく氣に掛けることはないが、悪い子なら無い方がまし。

(3) 子の多いのが幸福

多福多壽多男子、曰富曰貴曰康寧(二) 福が多く、長生きし、男の子が多く、富み、貴くそして無病無災である」と——人生の幸福。

多福多壽多男子、謝天謝地謝君王(三) 福が多く、天地に感謝し主君に感謝する。

沒兒女、誇乾隆(四) 子がないのをさつぱりしてよ」と自慢する——自慢にはならない。

(4) よい子でなければいけない

好子好七桃、歹子不如無(六) よい子は樂みであるがどう息子なら無い方がまし。

好兒不在多、浪子不如無(七) よい子なら數は問題でなく、どう息子なら無い方がまし。

好眼只要一隻、好兒只要一個(八) よい眼は一個で潭山、よい子なら一人で潭山。

歹子串飼父(九) えどら息子が親を養ふもの。

(5) 子を育てるに費が多い

多丁奪財(一) 男の子が多ければ費が多い。

(6) 子を育てるに心労多く、子のない方が樂

子女頭世冤⁽³⁾ 子女は前世の仇。
兒是冤家女是債⁽³⁾

兒是冤譴女是債⁽³⁾ 息子は前世の仇、娘は前世の負債——共に親の苦勞の種子である。

有兒有女是冤家、無兒無女是仙家⁽³⁾ 息子娘があるのは仇を有つ様なも、息子娘がなければ仙人の様に清閑である。

有子着子急、無子關息々⁽³⁾ 子があればやきもきさせられ、子がなければゆつたりする。
有兒雖得計、無兒免生氣⁽³⁾ 子があれば安心であるが、子がなければ腹を立てなくともすむ。

(7) 子が多い程苦勞が多い

一男一女是蓮花、三男四女是冤家、(紹興) 一男一女は一鉢の花、三男四女は仇——子が少いのはよいが多いのは重い頭枷。

一兒一女一枝花、無兒無女活菩薩、多兒多女多冤家⁽³⁾ 一男一女は一本の花、息子も娘もないのは活き佛、息子も娘も多いのは大勢の仇。

多兒多女多冤家、沒兒沒女活菩薩⁽³⁾

多男多女多冤家、一子一女坐蓮花⁽³⁾ 息子も娘も多いのは大勢の仇、一男一女は蓮の花の上に坐つてゐる様なもの——佛様の様に清閑である。

(8) 子は大きくなれば思ふ様にならぬ

子大爺難做⁽³⁾ 子が大きくなればおやぢはつとまらない。

子多爺難做、官大好題詩⁽³⁾ 子が多ければおやぢはつとまらなく、官等が高ければ詩をよむにあつらへむき。
兒子大似爺⁽³⁾ 息子が大きくなればおやぢの様なる。

兒大不由爺、女大不由娘⁽³⁾ 息子が大きくなればおやぢの思ふ様にならず、娘が大きくなればお娘の思ふ様にならない。
能生得子身、沒生得子心⁽³⁾ 子供の體を生むことは出来ても子供の心を生むことは出来ない。

一六、娘

男系中心の家族では娘は早晚他家のもの、異姓のものになる。それだけ家族との關係が薄く、したがつて大事にされない。しかもその娘を嫁入らせるに相當の仕度をしなければならず、娘は結局金を食ふもので育てなくともすむものである。² 他家にかたづく娘でも親に一つでは血を分けた可愛い娘であり、ねだられてはやはり断りきれず、不承々々もつて行かれるの

で結局娘は盜人見た様なものであり、しかも顔を彩らない強盗の様なものである。これを臺灣では『査某子賊』(査某子は娘のこと)といふ。『娘の子は強盜八人』、『娘一人に七藏あけた』、『娘三人は一身代』、『娘三人もてば身代潰す』と内地でも謂つてゐる。結局娘をもつてゐるのは貧乏してゐるしで、盜人でさへ娘が五人居る家にはよりつかない。

娘が婚家の方へ物をもつて行くだけかと思へば他方媳が里へ物をもつて行くことがあり、之も盜人として警戒される。従つて家に娘が三人をれば一袋と合せて盜人が四人居るといふことになる。娘が嫁入りの時或ひはその後に婚家へ物を持つて行く場合、親はしぶくであつても別に文句をいはないのが普通であるが、兄弟や嫂から苦情が出る事が多い。媳が里へ物を持つて行くことを臺灣では『顧外家』(里の事に構ひすぎる)といつて非難する。『査某子賊』が非難されるべきものであると同時に『顧外家』もほむべきことではなく、いづれにしても男系中心の社會では家産は男に属するものであり、女が之を何方に動かしても非難を免れない。⁴

一度かたづいた娘はこぼした水の様なものであり、生みの親の頼りになるものではない。娘は大事にされないのが常で、之を大事にするのは息子のない老夫婦位のものである。⁵

(1) 娘は他家にかたづくべきもの

飼査某子別人妾ち 娘を養つても他家のもの。

養女兒、外姓人そ 娘を育てゝも異姓の人——嫁入れば夫の姓を名のる。

小姐養到一百歲、究竟別人家個人そ お嬢さんを百歳迄養つてもつまる處は他家のもの。

(2) 娘は金を喰ふもの

義個閑娘暗賛じ 貸、不義閑娘也得過江蘇 娘は金を喰ふもの、義はなくともすむもの。

女孫是個賠錢貨、不義也得過江蘇 女孫娘は金を喰ふもの、義はなくともすむもの。

娶了媳婦滿室紅、聘了女兒滿屋窮江蘇 婦さんを貰へば家中財物で「つぱい」、娘を娘に出せば家中がら室になる。

(3) 娘は盜人

一個女兒三個賊、三個兒子九條龍江蘇 娘一人は三人の盜人に當る、息子三人は九匹の龍に當る。

女是不打險的強盜江蘇 娘は顔を彩らない強盜の様なもの。

家有五女賊不儉江蘇 家に娘が五人居れば盜人もよりつかぬ。

(4) 娘も又盜人

家有三個女、連娘四個賊江蘇 家に娘が三人をれば一袋と合せて四人の盜人。

(5) かたづいた娘はこぼした水

嫁出的女、賣出的田江蘇 娘に出した娘は賣出した田畠の様なもの。

嫁出去女兒、灑出去水江蘇 媚に出た娘はこぼした水の様なもの。

倉裏無米糲子貴、老來無兒女花香(山東) 倉に米がなければ糲が貴く、年とつて子がなければ娘が大事にされる。

一七、孝行と慈愛——親子の道

(イ) 孝行——子の道

孝行は百行の本であり人倫の大本であつて、何よりも先づ孝行をしなければならない。^① 鴉や羊の如き動物でさへ孝の道を知つてゐる。^② 人倫の基が確立されて爾餘の人倫が立つ。人が孝行を盡せば兄弟も妻も子も之にならうふが、一人の不孝が全家族を不倫不幸に陥らしめる。^③

然らば何が孝の道であるか。何よりもよく仕へることである。親の生きてゐるうちには心配苦勞をかけず、その意向を尊重し、大事にすること、祖先の祭りを絶さない様に後嗣を養ふこと、親が死亡した時は鄭重な葬式を出すこと等である。^④ 親に慈愛の情がなく子として如何ともしがたい時は、他郷にはしる。^⑤ 借金をしてゐる者が貸主を怨む如く、不孝ものは親を怨む。家財や妻子を大事にして親を疎する如きは、不孝の尤なるものである。^⑥

(1) 孝は人倫の大本

百行孝義先^(一) 百行は孝を先となす。

千書萬典、孝義爲先^(二) こんな書物でも孝義を先となす。

父母養孝順、兄弟養合和^(三) 父母には孝順しなければならず、兄弟は和合しなければならない。

(2) 動物にも孝行の道がある

羊有跪乳之恩、鴉有反哺之義^(一) 跪いて乳を飲む羊、親を養ふ鴉は、恩義を知つてゐる。

(3) 孝が確立されて他の人倫が立つ

一人盡孝合家歡^(三) 一人が孝行を盡せば一家の歡び。

一子不孝、九子皆滅^(三) 一人不孝であるなら九人の子共に滅ぶ。

子不孝、孫不賢^(三) 子が不孝であれば孫もロクなものでない。

兒不賢、媳不孝^(三) 息子が立派なものでなければ媳は孝行をしない。

有孝感動天^(一) 孝行は天を感動させる。

(4) 孝行の道

好子事父母、好女事家官^(一) 好い子は父母に仕へ、好い娘は舅姑に仕へる。

父不憂心因子孝、夫無煩惱是妻賢^(三) 父が心配しないのは子が孝行である爲であり、夫に苦勞がないのは妻が賢い爲である。

父老奔馳無好子、要別畠毎看見衣^(三) 父が年とつてから東西走るのは子が孝行しない證據であり、母の賢愚如何を知らうと思へば子の着物を見ればよい。

父在子不敢自專^(四) 父の在世中子は思ふ儘の振舞をすることが出来ない。

在生食一粒鴨母卵、較好死^(五) 孝一個大猪頭^(六) 亡くなつてから豚の頭を供へるよりも生きである中に驚き卵を一つ差上げた方がよい。

爲人子、不可不知處^(一) 人の子たる者は藝術心得てゐなければならない。

不孝有三、無後爲大^(二) 不孝に三あり、後嗣なきを第一とす。

送老歸山纔是兒、穿破綾綿經走衣^(七) 親の葬式を出して始めて本當の子であり、破れる迄着た綾綿にして始めて着物といふ。

(5) 親の不仁

父不仁、子奔他鄉^(八) 父が不仁であるなら子は他郷になじる。

(6) 不孝

不孝怨父母、欠債怨財主^(九) 不孝者は父母を怨み、借金してゐる者は貸主を怨む。

不孝怨父母、負債怨債主^(十)

範妻別離子不孝、替兒嫌妻母不賢^(十一) 妻を可憐がつて母と離れる子は不孝もの、子に代つて娘にかれこれ難癖をつける母は立派な母でない。

(口) 慈愛——親の道

親子關係において子が親に孝行するのは至上命令であつて、親が子に對して何かの義務を負ふことは云謂さるべき處ではない。併し庶民生活においては親の道が指摘されており、往々にしてそれが功利的・交換條件的にさへ嚮くのである。子に孝行して貰はうと思へば慈愛深くなればならず、夜具を糞尿で汚すものがあつて始めて墓場で冥紙を焼いて下れるものがある。¹ 孝行して貰はうと思へば先づ孝行をしなければならない。² そして徒に子を甘やかすことなく適當に教育して行くことも大事である。可愛い子ではあるが時には鞭をあてなければならぬ。だがそれはあくまでも親の愛の鞭であつて、子を折檻する時など、親は百歩以上追ひかけるものではない。又養子に出した息子や娘に出した娘は、悪い事があつても親として之を折檻するが如きことがあつてはならない³。

(1) 慈愛

父慈子孝、子孝親賢^(四) 父に慈愛あれば子は孝行であり、子が孝行であれば娘はよく仕へる。

傳謡に現れた臺灣及支那の家族生活

牀上沒有局床的、墳前沒有樟紙的⁽⁴⁾、寢床に糞尿をするものがなければ墓場で冥紙を焼いて下れるものがない。
他養我小、我養他老⁽⁵⁾ 彼が小さい時に育てゝ下れ、我は老後の彼に仕へる。

(2) 孝行して貴はうと思へば先づ孝行せよ。

要求順子、先孝爹娘⁽⁶⁾ 従順な息子を望むなら先づ親に孝行せよ。

孝順還生孝順子、忤逆還生忤逆兒⁽⁷⁾ 孝行ものは孝行の子を生み、不孝ものは不孝の子を生む。

(3) 訓 育

棒打出孝子、(江蘇) 棒で育てゝ孝行な子が出来る。

嬌兒不孝、嬌狗上灶⁽⁸⁾ 甘やかされた子は不孝になり、甘やかされた犬は灶の上に上る。

老子趕兒、不上百步⁽⁹⁾ 子を折檻しようとする父親は、百歩以上追ひかけるものではない。

奸爺不打過頭子、奸娘不打出嫁女⁽¹⁰⁾ よい父は養子に出た息子を打たず、よい母は娘を打たない。

一八、血のつながり

祭祀を掌る男の子を絶やさない様にするのが祖先崇拜の社會の最も大事な事であり、後嗣を得る爲に蓄妾も容認されてゐる。萬一どうしても男の子が出来ない時は過房子、螟蛉子などの形式をとつて養子を迎へる。併し直接の血縁に基かない子はやはりぎごちないものであり、自

分の腹をいため、自分が苦勞して育てたものでなければ親子の情愛が自然に湧き出て來るものでない。¹ 腹をいためた子（親生子）は千金を以てしても買へないものである。² 血を分けたもの同士は本能的に相親近し、相庇ひ合ふ。³ 親身な身内なら仲違ひしてもそのうちに又仲なほりし、親しくなる。血の絆は切つても切れないのであり、かへられないものである。⁴ 之にひきかへて血のつながりのないものはぎごちないもの、頼りないのである。所謂招夫養子の様な不自然なものは、萬やむを得ないものである。⁵ 義子の様な擬制的便宜的な關係に至つては更に味氣ないもので、關係が次の代にわたることは殆どない。⁶ だが併し、十箇月の懷胎もさることながら、生れた後の養育も大へんなものであつて、たとひ生みの親でなくとも育ての親の恩は極めて厚いものといはなければならない。⁷

(1) 腹をいためた子（親生子）

兒要親生、財要自振⁽⁸⁾ 子は腹をいためて生まなければならず、財産は自分の腕で稼がなければならない。

地要親耕、子要親生⁽⁹⁾ 田畠は自分で耕すに限り、子は腹をいためて生むに限る。

兒要自養、穀要自種⁽¹⁰⁾ 子は自分で生むがよく、穀物は自分で植えるがよい。

(2) 實子は金では買へない

一千銀、亦不值着一個親生子⁽¹⁾ 千兩の金も腹をいためて生んだ子に如かない。

千銀買無親生子⁽²⁾ 千金出しても寳子は買へない。

有錢難買親骨頭⁽³⁾ 金があつても血を分けた肉親は賣へない。

(3) 血を分けたものは本能的に相親近する

不⁽⁴⁾是親、不上心^(雲南) 肉親でなければ心にとまらない。

是親三分向⁽⁵⁾ 肉親には三分の依怙負貢がある。

是親三分相、是火熱似炭⁽⁶⁾ 血を分けたものなら三分は似通ふ、火なら炭の様に熱くなる。

(4) 血の絆

眞親惱不了百日⁽⁷⁾ 親身の身内なら仲遠ひしても百日を超すことはない。

眞親惱不上一百日、快刀割不斷長流水⁽⁸⁾ 親身の身内なら仲遠ひしてもそのうち又よくなり、鋭い刀を以てしても未長く流れる水を斷ち切ることは出来ない。

親者割之不斷、疎者鑿之不堅⁽⁹⁾ 肉親なら割いても断れず、疎い間柄ならくつつき合せても堅く結びつかない。

先親後不改⁽¹⁰⁾ ひと度内親の間柄であるなら後に變ることはない。

(5) 血のつながるぬもの

義是養的、抱還事抱的^(山東) 生んだ子は生んだ子であり、貰つた子はやがり貰つた子である。

家鶏打得園々轉、野鶏打得滿天飛⁽¹¹⁾ 家の鶏なら之を打つてもくる／＼走り廻るのみであるが、野の鶏なら之を打つば

四方八方に飛びまばる。

招夫養子、勢出無奈⁽¹²⁾ 招夫や養子は萬やむを得ない事情の爲。招夫は妻が夫と爲るべきものを自分の家に入れる婚姻で、夫は婦家の姓氏及財産を承繼する權利がない。

(6) 義子

有義子、無義孫^(山東) 義子はあつても義孫はないもの。

(7) 育ての親の恩

生身父母在一邊、養身父母大如天⁽¹³⁾ 生みの親はまだしも、育ての親の恩は天の様に高いもの。
有奶就是娘⁽¹⁴⁾ 乳をのまして下れるものが則ち母である。

一九、繼母（後母）

繼母は繼子には始めから怖いものである。¹ 繼子を可愛がることがあつても極めて氣まぐれなものにすぎない。² 繼子にとつては、いくらよい繼母でも母にはかへられず、³ 又繼母にとつてはいくら努めても繼母の名は毒がれない。⁴ そして子にとつて哀れなことには、父が後妻を迎へると自分に對する愛が薄らぎ、繼母の後へやがて繼父が出來ることである。⁵

(1) 繼母はこぼいもの

前人子、不敢食後母⁽¹⁾。先妻の子⁽²⁾は繼母の乳⁽³⁾はほぐれ、可愛がつてもほんの一寸の間。

(2) 繼母の愛は氣まぐれ

親娘後始子、終起來一陣子⁽⁴⁾。繼母⁽⁵⁾は氣まぐれ、可愛がつてもほんの一寸の間。

(3) 繼母は母の代りにならぬ

再好月光不當火、再好家婆不當娘⁽⁶⁾。いくらあかるい月の光でも燈火の代りにならず、いくらよし繼母でも母の代りにならない。

姨娘懷裏聞娘香⁽⁷⁾。繼母の懷で母のこぼひをかく。

(4) 繼母はいくら努めても駄目

銅鑼較打銅鑼聲、後母較好後母名⁽⁸⁾。銅鑼⁽⁹⁾はいか聲にたゞいても銅鑼の音しか出ない、繼母⁽¹⁰⁾は如何様に努めても繼母⁽¹¹⁾はされる。

(5) 繼母の後に繼父が出来る

後母較做、後母名⁽¹²⁾。繼母⁽¹³⁾は如何様に努めても繼母⁽¹⁴⁾といはれる。

認了晚娘、就有晚娘⁽¹⁵⁾。繼母⁽¹⁶⁾が來ると繼父⁽¹⁷⁾が出来る。

有了晚娘有晚娘⁽¹⁸⁾。繼母⁽¹⁹⁾があると繼父⁽²⁰⁾が出来る。

110. 婦 僕

現代の家族概念では婢僕は家族構成員に算へられない。否、現代文明社會では既に法制上婢僕といふ身分が存在してゐないのである。併し舊い支那及臺灣では婢僕は家族構成員に數へられてゐる。之は支那臺灣に限るものでなく、古代の西洋も又同様であることは、例へば family (家族)といふ語がラテン語の *familia* ([主人に屬する奴僕全部]) といふ語に由來するものであらんとに徵しても明かである (Reglan : *The Meaning of the Word "Family"*, Man, Vol. xxv, 1931, No. 2.)。

臺灣では奴僕を奴才といひ、女婢を查某嫗といふ。奴才是比較的前になくなつてゐるが查某嫗はかなり後まで存續してゐた。法制上查某嫗といふ身分を認めなくなつてからも媳婦子又は養女といふ形式で使役する場合も少くない。查某嫗は女性家族のあるもの——例へば姑、娘又は媳——に専属する場合が多い。『嫗』に對して主人を『娘』と稱する。總ての貧乏嫗は皆この嫗が引くもので、たゞ——亭主や他の家族にいぢめられると嫗にはけ口を求めて之に當りちらす。よしことは皆『娘』のものであるが悪いことは皆『嫗』がせぬはなければならない。さればこそ娘になるのは容易であるが嫗になるのは中々つらいことである。併し女婢は奴僕や傭人に比べてはまだましの様で、時たま與様に昇格出世することもある。

(1) 女婢はつらいもの

查某廬撲肉、生看無俗^(三) 女婢が肉をさげてゐる様なもので、生の内は眺められるが料理してしまへばふれることさへ出来ない。

做娘快、做廬難^(一) さ奥様になるのは容易であるが女婢になるのは中々つらい。

(2) 女婢は出世することもある

只有了頭做太太、不有長工做老爺^(三) 女婢は奥さんに昇格することがあつても、傭ひ入夫^(二) 旦那になることさへ

第四 兄弟姊妹

二二一、兄弟關係

兄弟は同じ腹から生れたもの、即ち所謂同胞である。血縁といふ點から謂へば最も近似してをり、従つて最も親しい間柄である。¹ 親の膝下にある間兄弟は最も親しいものであるが、成長した後の兄弟關係は、生活の状態如何によつて異なる。外敵に對して家の生活を防衛して行く必要のある場合、兄弟は最も手近な且つ献心的な協働者である。虎を狩るにも盜人を捕へるにも血を分けた兄弟が相棒として一番よいものである。² この場合における兄弟の關係は妻子と

の關係よりも更に重視される。兄弟は手足の如きもの、妻子は衣服の如きものである。衣服は破れても繕ふことが出来るが手足は折れてはつなくことが出来ない、といふ思想がそこから生れる。³ 外敵防衛の爲に協働する必要なく平和な生活が營まれてゐる場合、兄弟は成長すればつひに相分れてそれく一家を構へる。そしてやがては他人になる。⁴ 殊に利害關係が共通してゐるのでその爲に相争ふ場合が少くなく、兄弟は兄弟でも金錢は別々であり、勘定ははつきりさせなければならぬ。⁵ 兄弟が互に信せず、殊に各々妻の告口をきく様になれば、激しい争ひに陥ることがある。。そして世間には、肉親が親身にならず、肉親でないものがかへつて親身になる場合も少くない。⁶ 併し骨肉相喰むことは何といつても悲むべきこと⁷ いはなければならない。兄弟相争へば徒に他人の侮を招くのみである。⁸ だが兄弟は元々一つの蔓に成つた實であり、仲たがひしても元へ戻れば心は一つである。よからうが悪からうが他人は他人であり兄弟はやはり兄弟であつて、いざといふ時にひとつ心になつて當るのはやはり兄弟である。たとひ激しい喧嘩で傷を負はされても、他人にあはされた傷の様に心の傷として残ることはない。世の中で得がたいのはやはり兄弟である。⁹

(1) 兄弟は骨肉至親

骨肉至親^(一) 兄弟のこと。

兄弟者骨肉^(一) 兄弟は骨肉の如し。

(2) いざといふ時は兄弟に限る。

打虎、諸親兄弟^(一) 虎狩りには血を分けた兄弟でなければならぬ。

打虎拿賊、諸親兄弟^(一) 虎狩りにも盜人を捕へるにも血を分けた兄弟でなければならぬ。

打虎還是親兄弟^(江蘇)

打虎離不掉親兄弟、上陣離不掉父子兵^(雲南) 虎狩りには血を分けた兄弟は缺かされず、戦には親子の兵隊は缺かされない。

打虎必須親兄弟^(三)

打虎不離親兄弟、上陣不離父子兵^(東莞)

打虎還須親兄弟、上陣須當父子兵^(三) 虎狩りにはやはり血を分けた兄弟がよく、戦には親子の兵隊は缺かされない。

(3) 妻子よりも兄弟

兄弟如手足、妻子如衣服^(一) 江蘇、東莞 兄弟は手足の如く、妻子は衣服の如し。

衣裳破尙可補、手足斷難連^(三) 衣服は破れても縫ふことが出来るが、手足は折れてはつなくことが出来ない。

(4) 兄弟も分れてしまへば他人

小時是兄弟、長大各鄉里^(一) 小い時は兄弟だが成長すれば離れ離れになる。

兄弟分開或離舍^(三) 兄弟も分れてしまへば他人になる。

兄弟分開五服外^(三) 兄弟も分れてしまへば他人。五服は五種の喪服、五服外は服喪關係の外になる」と。

(5) 金錢のことははつきりさせなければならぬ

親兄弟、明算帳^(三) 杭州 血を分けた兄弟であるが勘定ははつきりさせよ。

好兄弟、勸算帳^(三) よい兄弟は勘定を凡帳面にする。

兄弟雖親、財則各別^(三) 兄弟は親しくとも財産は各々別々である。

若婆兄弟賢、明算伙食錢^(三) 立派な兄弟になつて貰ひたければきら／＼食費を拂ふこと。

兄弟是兄弟、過江須用錢^(二) 兄弟は兄弟でも河を渡る時は渡賃を出さなければならない。

(6) 兄弟の不信、争ひ

兄弟不信情不深、朋友不親交易疎^(三) 兄弟が互に信じ合はなければ情は深くならず、友人は親近しなければ貿易が疎くなる。

聽婦言、乖骨肉^(一) 妻の告口をきいて骨肉に乖く。

兄弟相打硬如鐵^(三) 兄弟が喧嘩をすれば鐵の様に硬い——双方意地を張つて相譲らない。

(7) 他人と身内

是親不是親、非親却是親^(一) 身内が親身にならず、身内でないものがかへつて親身になる。

(8) 兄弟の争は外の侮を招く

兄弟不和別人欺負^(二) 兄弟が不和であれば他人が馬鹿にする。

兄弟不和傍人欺^(三) 兄弟が不和であれば隣近の人が馬鹿にする。

兄弟刀槍殺、血被外人踏^(三) 兄弟が刀や槍で切り合へば血は他人にふみにぢられる。

兄弟相害、不如獨生^(二) 兄弟が害し合ふ位なら獨り生れるに如かない。

左掌打右手、雖勝不如無^(四) 左の拳が右の手を打つて勝つた處で、無い方がまし。

(9) 兄弟はやはり兄弟

苦瓜雖苦共一藤、兄弟雖果共一心^(三) 苦瓜は苦くとも元々一つ蔓になつたものであり、兄弟は仲が悪くとも心は一つである。

奸煞了是他人、壞煞了是自己^(四) よくても他人は他人、悪くても身内は身内。

家口狗、咬無痕^(一) 身内の犬は咬みあつてもひどいことはならない。

兄弟狗、咬無痕^(二) 兄弟犬は咬みあつてもひどいことはならない。

兄弟殺一刀、貰一介疤^(四) 兄弟に切りつけられても創痕が出来るのみ——さして害にはならない。

誰得者兄弟、易得者田地^(四) 得がたいのは、兄弟、得易いのは田畠。

一一一、家族秩序内における兄弟

兄弟には長幼の順序があり、兄が弟を教訓し打つことは世間によくあることであるが、弟が兄を打つのは許されない處である。¹ 男系家族において長兄は父の後を繼ぐものであり、他の兄弟に對して自ら特別の地位を占めてゐる。上の兄には父の如く、上の嫂には母の如く仕へるべきものであり、父の亡くなつた後は兄に従ふべきものである。²

(1) 長幼の序

大是兄、小是弟^(一) 大きいのは兄、小さいのは弟——長幼の順序がきまつてゐる。

兄拍弟、務者例、弟拍兄、上官廳^(福建) 兄が弟を打つのは世間にありふれたこと、弟が兄を打てば役人にひっぱられる。務は有。

(2) 長兄は父の代り

長兄如父、長嫂如娘^(三) 上の兄は父の如く、上の嫂は母の如し。

有父從父、無父從兄^(三) 父があれば父に従ひ、父がなければ兄に従ふ。

一二三、姉妹關係

姉妹關係は男系家族では意義が極めて薄く、それに關係する俚諺も非常に少い。兄弟關係は本ものだが姉妹關係は贋ものといふ一言がよくその間の消息を物語つてゐる。

親哥々、假姊妹、兄弟は本ものだが姉妹は贋もの

第五 親族、姻族

二四、親族姻族關係

庶民生活において比較的に交渉が多く、従つてそれに關係する俚諺の存する親族姻族關係は、次の如くである。

母方		父方		母方	
姉妹	兄弟	姉妹	兄弟	姉妹	兄弟
姨	舅	姑	叔伯	同上の配偶者	これに對する父方及母方の本人の稱謂
姨丈	妗	丈	嬸姆	兄弟姊妹の子	これと本人との間柄
甥	甥	外甥	姪	叔伯の子	叔伯兄弟
姨の子	舅の子	姑の子	姑表兄弟	姑表兄弟	姑表兄弟
姨表兄弟					

父の兄（伯）及び弟（叔）は同じ家に住む場合が多く、關係の深いものであるが、父に比べて一段と疎いものではあるのは當然なことである。^{○一} 父の姉妹（姑）とは比較的に親しく往來するものであり、姑の配偶者たる姑丈とは半子の分があると謂はれてゐるが、併し直接に血の續いてゐる姑が亡くなれば關係が疎くなるのも自然の勢である。^{○二}

母方の親戚の内母の兄弟（舅）とは一番親しくつき合ふ。舅は姻戚關係において女家の代表者になるものであり、兩家に悶着が起れば外甥にとつて怖い存外であるから、客としても非常に大事なものである。⁵ 概して舅は外甥を可愛がり、⁴ 外甥は又舅に似るものが多いと謂はれてゐる。⁵ そして舅の愛情に甘へて無遠慮に振舞ふのである。⁶

母の姉妹（姉）になると關係がずっと薄くなり、姉の生存中の附合に止まる場合が多い。姑、舅、娘の子は本人にとつては表兄弟、表姉妹に當る。表兄弟は互に無遠慮な親しい仲であるが、併し血のつながりも漸次薄くなり、生活上の協働もないのに、關係が漸次にうすれて行くのである。

(1)
父の兄弟

故是叔、伯是伯、山裏胡桃差一頃ミ。叔は叔、伯は伯、山の胡桃に一重の隔りがある。

(2) 父の姉妹

姑舅親、輩々親、打折了骨頭連筋(三) 姑と舅の方の親戚は代々親しい、骨を折つてしまつても筋肉にくつつく。
外甥姑丈、半子之分(三) 外甥と姑丈とは半子の分。

有姑是姑丈、無姑歸和尚(三) 姑が生きてゐる内に姑丈だが、姑が亡くなればなまくさ坊主——縁もゆかりもないものになると。

(3) 母の兄弟——舅

娘親舅大、爺親叔大(三) 母の血族では舅が大事、父の血族では叔が大事。
除了娘舅無大客(三) 舅の他には大事な客はない。

天眞天公、地下母舅公(一) 天上では天の神、地上では祖母の兄弟——大事なもの、こばいもの。
天上的雷公、地下的舅公(三) 天上の雷地上的祖母の兄弟。

(4) 舅は外甥を可愛がる

豕狗衛護畜生、娘舅衛護外甥(紹興) 猪や犬は畜生をひいきにし、舅は外甥をひいきにする。

(5) 外甥は舅に似る

外甥多似舅(三) 外甥は多く舅に似る。

外甥多像舅(越謡)

(6) 外甥は舅には無遠慮

娘舅家、吃然不肯罷(三) 舅の家では腹一ペイ食べても未だ承知しない——その上の要求をする。
外甥兒是狗、吃了就要走(三) 外甥はあるで犬の様だ、飯がすんだかと思ふとすぐ行つてしまふ——無遠慮。

(7) 母の姉妹

娘姨親、娘姨死子弗是親(三) 娘姨（母の姉妹）の方の親戚は、娘姨が死んでしまへば親戚でなくなる。

(8) 表

表兄弟、脫褲牽整屨(福建) 表兄弟同士、裸になつて蟹をとる——互に遠慮いらない。

一代親、二代表、三代各子孫(三) 一代目は親戚、二代目は表、三代目になると何でもなくなる。

一表三千里、再表不認親(三) 一代目の表には三千里の隔りがあり、二代目の表になるともはや互に親戚と思はない。

第六 家

一二五、世
代

家は世代の流れである。父より子へ、子より孫へと受け継がれ、家族が繁殖して流れて行く。¹
流れる世代は併し又一代一代によつてくぎられる。そして最も親身になるのは自分に續く前後の代で、祖父と孫とではその間に隔りがあり、いくらか疎くなる。² 一代目は苦勞し、二代目

¹ 但謡に現れた臺灣及支那の家族生活

は産をなし大をなすが苦勞を知らない三代目から左前になる。これが世の常である。そしてこの世代の浮沈が即ち家の浮沈である。³⁾

自分が苦勞しても、否自分が苦勞しただけ子孫には苦勞させまいとするのが世の親の心である。子孫に屋敷田畠を残さうとして親は馬車馬になつて働く。ひづくんぞ知らん、財産を多く残すのがかへつて子孫を誤らす所以である。苦勞を知らない子孫は、思ふ様にならないと墳墓や屋敷の風水地理のせいにしてしまう。⁴⁾ 何よりも残すべきは立派な子孫で珠玉財寶ではない。そしてこの立派な子孫は金では買へない。⁵⁾ 子孫が自分に若かないものなら財産を残しても仕方なく、子孫が自分に勝るものなら今更財産を残す必要はない。子孫には子孫の福運があり、子孫の爲に馬車馬になつて稼ぐことはない。結局子孫の爲に陰徳を積むのが最もよいことである。

(1) 家は世代の流れ

上代傳下代(三、山東) 上の代から下の代へ傳へられる。

世傳世⁽¹⁾ 一代から一代へ傳へる。

父傳子、子傳孫⁽²⁾ 父から子に傳へ、子から孫へ傳へる。

嘗節祭輪流坐(福建) 麗亭の前の椅子は代りばんこに腰かける。

廿年新婦廿年婆、再過廿年做太婆(三、紹興) 二十年の娘さん、二十年の姑さん、更に三十年たてばおばあさんになる。一人三子、六代千丁⁽³⁾ 一人に三人の子があると六代で千人になる。

(2) 世代によつてくわられる

一代只理一代入(福州) 一代のものは只一代のものを構ぶのみ。

郎龍使子、子使孫(同) おやちは子を使ひ子は孫を使ふ。

一代管一代、那有孫子養奶奶⁽⁴⁾ 一代のものは一代のものを構ぶのみ、孫が祖母を養ふことはない。

皮隔皮、孫子弗如倪(紹興府) 皮一重が隔つてゐる、孫は子にま及ばない。

皮隔皮、孫子不如兒⁽⁵⁾

隔層肚皮隔層山(三、山東) 脛の皮一重隔つてゐるのな山一つ隔つてゐる様なもの。

一層皮一層山⁽⁶⁾

一層皮肉隔如山⁽⁷⁾ 皮と肉一重隔てれば山一つ隔つてゐる様なもの。

(3) 世代の浮沈

一代賢、一代癡、一代掛鐵鍊⁽⁸⁾ 一代曰は賢い、次の代は阿呆、更に次の代は鎖につながれる。

一代精明、一代癡⁽⁹⁾ 一代は精巧で一代は阿呆。

一代不如一代(福州) 一代が一代にしない。

老子賺錢子享福(東莞) おやぢが稼いて子が享樂する。

俚諺に現れた臺灣及支那の家族生活

爹々買田孫子賣、快活中一代(山東) おやぢが田畠を賣つて孫が賣る、眞中の代が樂をする。

子賣筋田地、繼來之物⁽³⁾ 子がおやぢの田畠を賣る、どうせ只で賣つたもの。

子孫賣田不論本⁽³⁾ 子孫が田畠を賣る時は本がいくらかゝつてゐるかを穿鑿しない。

(4) 遺產は子孫の爲にならない

做不盡子孫屋、買不盡子孫田⁽³⁾ 子孫に残す屋敷田畠はいくらあつらへてもきりがない。

田多害子孫⁽³⁾ 田畠を多く残すとかへつて子孫の爲にならぬ。

子孫無福、賴墳賴屋⁽³⁾ 子孫に福運がないと墓のせいにしたり家のせいにしたりする。

(5) 財產よりも立派な子孫を残す⁽³⁾

人皆愛珠玉、找鑿子孫賢⁽²⁾ 人は皆珠玉を望むが、私は子孫の立派になるのを望む。

好田地、不如好子弟⁽²⁾ よい田畠よりもよい子弟。

買盡夫下物、雖買子孫賢⁽³⁾ 天下の物を買て盡すことは出来ても子孫が立派になるのを買ふことは出来ない。

有錢難買子孫賢(廣東) 金があつても子孫が立派になるのを買ふことは出来ない。

(6) 子孫の爲に苦勞する」とはない

兒孫不如我、要錢做甚麼、兒孫勝似我、要錢做甚麼⁽³⁾ 子孫が自分に如かないものなら金を残して何にならう、子孫が自分に勝るものなら金を残す必要はない。

兒孫自有兒孫福、莫爲兒孫作馬牛⁽²⁾ 子孫には子孫の福があるから子孫の爲に馬車馬になるには及ばない。

但存方寸地、留與子孫耕⁽²⁾ 只方寸の地を残して子孫に耕させるがよい——子孫の爲に陰謀を積むがよいの意。

一一六、家 の 組 織

する必要はなく、子孫が自分に如かないものなら、巨萬の家財を残してもどうせ無くなるものである。

有好兒孫、弗用牢起屋⁽³⁾ よい子孫があれば頑丈な家を建てるに及ばない。

兒孫自有兒孫福、莫爲兒孫作馬牛⁽²⁾ 子孫には子孫の福があるから子孫の爲に馬車馬になるには及ばない。

但存方寸地、留與子孫耕⁽²⁾ 只方寸の地を残して子孫に耕させるがよい——子孫の爲に陰謀を積むがよいの意。

家には組織があり、秩序がある。長幼大小自らその順序があつて、その家に入るものはそれに従はなければならぬ。¹ 國に王がある如く家にはその主人が居る。そして天に二日がない様に家に二人の家主があつてはならない。たとひ家族が千百に上つても家事を處理するのは家主一人である。家主は一日と雖も缺くことが出来なく、主人のない家は掃を逆に立てた様な状態に陥る。家主は家族を統制して行くのみでなく、全家族の對外の責任をも負ふものである。² 家主が王に當るものなら長子は大臣に當るもので、家主の監督の下に家事萬般を處理して行く。長子は家の宗堂と灶から離れてはならない。長子の屬する房、即ち長房は家を繼ぐものであるから、長房に子のない場合二房の子は過房子となるべきものである。³

祖先崇拜の社會において元々老人が尊重されるが、傳統に生きる社會において豊富な經驗を有つてゐる老人は殊に重寶がられ、大事にされる。⁰⁴ 木が大きくなれば枝が分れる様に、家も大きくなれば分家するに至る。分家すべし時に之を行はなければかへつて統制が亂れ争ひが起つて家道が衰へることがある。併し分家はやはり好ましくないものである。大きい家も分ければ小さくなり、小さい家に至つては分けてしまへば殆ど無一物になつてしまふ。そして分家して三年もたてば他人になつてしまふ。⁰⁵

(1) 家規

家有家規、店有店規^(三) 家に家のしきたりがあり店に店のしきたりがある。

長幼内外、宣法蕭蕭嚴^(一) 長幼内外は宜く規則を正くし言謔を嚴格にしなければならない。

大尊大、細尊細^(二) 目上は目上として尊び、目下の者は又それ相應に尊ぶ。

入吾門、診吾法^(六) 此處の家の人になれば此處の家のしきたりに従ふもの。

(2) 家主

家有主、國有王^(三) 家に主人があり、國に王がある。

在天無有兩日、在家無有兩主^(三) 天に二つの太陽無く、家に二人の主人はない。

家有千百口、主事在一人^(三) 家族が千人に上つても事を主るのは一人である。

- 家不可一日無主、國不可一日無王^(三) 家は一日と雖も主がなくてはならず、國は一日と雖も王が無くてはならない。
- 家無主、掃帚禪倒壁^(三) 家に主人が居なければ掃帚が逆に立つ。
- 家人犯法、罪及家主^(三) 家族が法を犯せば罪は家主に及ぶ。
- 家奴犯法歸家主^(三) 家奴が法を犯せば罪は家主に歸せられる。

(3) 長子、長房

家有長子、國有大臣^(三) 家に長子あり國は大臣ある。

家濃長子、國濃大臣^(三) 家は長子により國は大臣による。

家用長子、國用大臣^(一) 家は長子を用ひ國は大臣を用ふ。

長子不離宗堂、么兒不離娘房^(三) 長子は宗堂を離れず、末子は母の部屋を離れない。

長子不離社^(三) 長子は社を離れない。

長房無子、次房不得有子^(三) 長房に子が無ければ次房は子を有つことが出来ない——過房子として長房へやらなければならぬ。

家有一老、如有一寶^(三) 家に老人が一人居るのは寶物がある様なもの。

家有老、是個寶^(三) 家に老人が居るのは寶である。

(5) 分家

人大分家、樹大分根⁽¹⁾ 木が大きくなれば枝が分れ、家族が多くなれば家が分れる。

譲分不分、家業遺棄⁽²⁾ 分家すべき時に分けなければ家業が衰へる。

小家吃窮、大家分窮⁽³⁾ 小い家は食つて貧しくなり、大きい家は分けて貧しくなる。

大家分小、小家分了⁽⁴⁾ 大きな家は分家すれば小さくなり、小さい家は分家すれば何もなくなる。

分家三年成隣舍⁽⁵⁾ 分家も三年たてば他人と同じ。

二七、家 の 統 制

修身、齊家、治國、平天下は儒教の根本命題である。家が治められないものに國が治められる筈がなく、國を治めようと思ふものは先づ家を齊へなければならない。併し實際の處國よりも家の方が治めにくく、千軍萬馬を統轄することが出來ても臺所や灶を齊へるのは却々の難事である。^① どの家にも何かのいざこざ、他に漏すことの出来ない難點がつゝものである。^② 悪妻逆子に至つては、矯める事も出來ず去らすことも出來ず、全く手のつけやうがない。^③ 悪事を働く家族は放置する理にも行かず、表に出して法で正す理にも行かず、之又如何とも仕様のないものである。^④ 家族のいざこざは複雑深刻なものであり大岡の名裁判を以てしても裁くこ

とが出來ない。^⑤

家が家として存續するには何よりも和合が第一である。和合さへすれば萬事成り、家運が開けて行く。たま～一人でも擾亂するものがれば家族全體が混亂に陥る。そして家の不和は貧乏の本であり、外侮を招く所以である。和合の如き消極的なことの高調は小家族生活者から見れば奇異に思はれるが、併し大家族生活にとつて和合は實に切實であり、重要な問題である。和合しその上に家族が心を一つにして努力すれば、土が黄金に變り家門が繁榮する。^⑥

(1) 家を治める

不能治家、焉能治國⁽¹⁾ 家を治めることが出來ないのにどうして國を治めることが出來よう。

國易治、家難齊⁽²⁾ 國は治め易いが家を治めるのは困難。

治家難、治國易⁽³⁾

能管千兵萬兵、難管廚房寵下⁽⁴⁾ 千萬の兵を統轄することは出来るが、臺所や寵を治めるのは容易でない。

(2) どの家にもいざこざはある

長短家々有⁽⁵⁾ いざこざはは何の家にもある。

誰家林裏、沒有樹々樹⁽⁶⁾ 家の林の中にうね／＼曲つた木のない家があるだらうか。

誰家門前、沒有至靈樹⁽⁷⁾ 門前にうね／＼曲つた婆の木のない家があるだらうか。

俚諺に現れた臺灣及支那の家族生活

誰家沒有幾把漏壁^(二) 窼れる壺の二つ三つない家があるだらうか。

誰家墳前、沒有至勝樹^(三) 墓場の前に曲つた木のない家があるだらうか。

家々都有一本難念的經^(三) 何の家にもあげられないお經が一冊あるもの。

(3) 悪妻逆子

惡妻孽子、無法可治^(一) 悪い妻に悪い子は手の施し様がない。

歹其孽子、無法可治^(一)

蠻妻劣子、無法可治^(三)

蠻妻拗子、無法可治^(三)

惡妻逆子、無法可治^(廣東)

蠻惡難理、淫婦難治^(三)

(4) 悪事を働く家族

家賊難防^(一) 家の中の盗人は防ぎ様がない。

家賊難防、偷過屋櫓^(三) 家の中の盗人は防ぎ様がない、屋根越しに偷んで行く。

無好家神、通外鬼^(一) 質の悪い家の神が外の鬼と通ずる。

(5) 家のいざこざは裁判官にくる

三廳官難判家內事^(一) (六) 裁判官が三代かはつても家庭のいざこざは裁かれない。

(6) 家族の和合

清官難斷家常事^(一) 清廉な役人も家庭の事件は裁かれない。
清官難斷家務事^(杭州)

(6) 家族の和合

家和萬事成^(一) 一家和合すれば萬事成る。

家和萬事興、家衰口不寧^(廣東) 一家和合すれば萬事興隆し、家が衰へば口角が絶えない。

父子和而家不退、兄弟和而家不分^(一) 親子が和合すれば家が衰へず、兄弟が和合すれば家が分れない。

一家之計在於和、一生之計在勤^(一) 一家の計は和合に在り、一生の計は勤勉に在る。

家和人和萬事和^(三) 一家が和合し人が和合すれば萬事なごやかである。

家不和、防隣欺^(三) 一家が和合しなければ隣近所に侮られるのを用心するがよい。

家弗和防隣欺、隣弗和防外欺^(三) 一家が和合しなければ隣近所に侮られるのを用心するがよい、隣近所が和合しなければ外の人に侮られるのを用心するがよい。

家裏不和外人欺^(三)

家中不和睦里欺、隣里不和說是非^(三) 家中のものが和合しなければ隣近所に侮られる、隣近所が和合しなければ外れこれ謂ふ。

一壺金魚、沒堪得一尾中斑^(一) 壺の中の金魚は一尾の中斑の亂妻に堪へられない。中斑は三斑とも謂ふ、よくあはれる小魚の一種。

三班齊家⁽¹⁾ 三班が家をかき亂す。

家不利、萬世窮⁽²⁾ 一家が不利であれば萬代貧窮する。

家開萬世窮⁽³⁾ 家にござござが絶えなければ萬代貧窮する。

家門和順、雖貧矣不穢、亦有餘歡⁽⁴⁾ 家中が平和ならば三度の食事が充足で無いとも亦樂みがある。

家有一様心、黃土鑿成金^(江蘇) 家中のものが心を一つにすれば土も金に變る。

家人一條心、黃土鑿成金^(雲南)

二二八、家のいとなみ

家の毎日の營み、對外のこと、對内のこと等についても断片的な俚諺が若干ある。之は主として『朱子家訓』からとつたものである。毎日の營みについては、朝は早く起きてふき掃除し内外を整頓すること、夜は戸締りして自ら點検すること、火の用心、盜人の用心をすること等である。¹ 對外のことについては、金錢上の交渉はとかく争ひを起しがちであるから親戚の間では出来るだけ之を避けること、交渉のある場合は之をはつきりさせること、坊主尼等をみだりに出入りさせないこと、いかがはしいものの出入を防ぐ爲に家をきちんとすること、因縁興隆の前ぶれである。²

(1) 每日の營み

黎明即起、灑掃庭除、要内外整潔⁽⁵⁾ 朝早く起きて拭き掃除を爲し、家の内外を整頓すること。

既昏便息、關鎖門戶、必親自檢點⁽⁶⁾ 夜になつたら休み、門を鎖したら自分で調べよ。

家中從有千般事、臨睡廚房走二回⁽⁷⁾ 家にどんなに忙しい事があつても眠る前は臺所を一度見廻らなければならない——火の用心。

朝々防火、夜々防賊^(江蘇) 日毎に火の用心、夜毎に盜人の用心。

年々防饑、夜々防盗^(平遠) 年毎に飢餓の用心、夜毎に盜人の用心。

日防風浪之險、夜防盜賊之憂⁽⁸⁾ 日間は風浪の危険を用心し夜は盜賊の憂を用心する。

早々關門早々睡、免得人家說是非^(山東) 他にかれこれ謂はれない様に早く戸締りをして早く眠るがよい。

(2) 對外のこと

親眷莫交財、交財則惡閑^(三) 親戚は金錢のやりとりをするな、金錢のやりとりをすれば仲違ひする。

親是親、財帛分^(三) 親戚は親戚でも金錢は別々である。

前門不進師姑、後門不進和尚^(三) 前門から尼を通すな、後門から坊主を通すな。

門戸破綻、猪狗跡藏^(一) 門や戸ががた／＼してゐたら豚や犬が隠りに出入する——家がきちんとしてゐなければいかがはしい者が勝手に出入する。

絕份家業無三代^(山東) 死絶えたものの財産を受け繼いでも三代とは傳はらない。

有錢不買是非業^(三) 金があつても因縁のつてゐる田畠は買ふな。

居家波爭訟、訟則終凶^(一) 家に居ては争を戒めよ、訴訟をすれば結果がよくない。

還了債、起了家^(一) 借金を返せば家が起せる。

國課早完、郎糞糞無餘、自得至築^(一) 税金を早く納めれば財布に餘す所が無くとも氣は樂である。

(3) 對内のこと

男人終、女人理^(一) 男が稼ぎ、女が整へる。

老婆無空唐聞^(大) 女房は家を空けてきく理には行かぬ。

祖宗雖遠、祭祀不可不誠^(一) 祖先は古くとも祭祀は誠を以てしなければならぬ。

兄弟叔姪、須分多潤寡^(一) 兄弟叔姪は須く多きを分ち寡きを潤す様にしなければならぬ。

勿營華屋、勿謀良田^(一) 華美な家を營むな、良田を買ひあさるな。

二十九、我 家

何はともあれ家は各人のこの上ない安住地である。他人の金殿玉樓よりも荒屋の我家がゆつたりして心をあつつかせる、而して一家樂樂は黃金では買へない貴いものである。

(1) 楽しい我家

人家的金窩銀窟、不如自家草窩^(杭州) 他の金の家銀の家よりも自分の藁の家。

別家金窩銀窟、不如自家狗窩^(一) 他の金の家銀の家よりも自分の犬小屋。

他人龍床、不如自己狗藪^(三) 他人の立派な寝床よりも自分の粗末な寝床。龍床は天子の寝床。狗藪は狗の眠る處。

猪巢不值狗巢尤^(一) 猪小屋は質いけれども犬の巣の寝つきのよいのに及ばない。

不是一家人、不進一家門^(三) 一家のものでなければ同じ出入口から出入しない。

萬兩黃金未爲貴、一家安樂值千金^(一) 萬両の黃金も未だ貴と爲さず、一家の安樂は千金に値す。